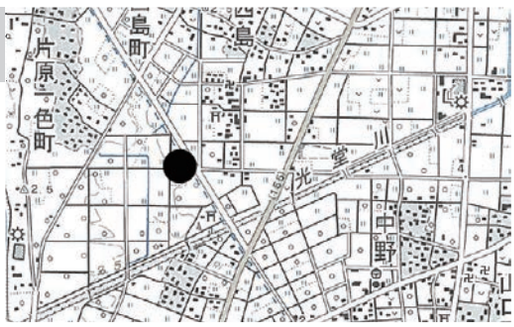
II. 遺跡調査の概要

いっしきじょうあと 一色城跡（本発掘調査B）



調査地点（1/2.5万「清洲」）

所在地　稲沢市西島本町地内
（北緯35度15分00秒 東経136度44分58秒）

調査理由　県道給父稲沢線道路改良工事

調査期間　令和2年11月～令和3年2月

調査面積　1,350㎡

担当者　池本正明・永井邦仁

調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行なった。今年度は、昨年度の発掘調査区（19A～D区）から尾張水道みち（旧・尾張サイクリングロード）を挟んだ西側で、南北幅約16～18mで東西に最大87mの調査対象地を、3調査区（20A～C区）に分割して調査を進めた。

立地と環境　遺跡は、尾張平野北西部の沖積低地に所在し、東に三宅川、西に日光川が流れる氾濫原（自然堤防帯）に立地する。昨年度の調査区は、南北に長い微高地（自然堤防）を東西方向に横断する形で設定され、その頂部から南東縁にかけて古墳時代～奈良時代の集落が広がり、その後中世になると、微高地全体が集落域として区画溝が縦横に巡る景観へ変化したことが明らかにされた。なお、その西縁は古墳時代前期前半まで河道となっていたことが判明し、急速に陸地化したとみられる。一方で今年度の調査区は、南方約100mに位置する神明社付近から延びる微高地の北端にあると考えられる。神明社周辺では稲沢市教育委員会が昭和58年度に発掘調査を行い、弥生土器や灰釉陶器・山茶碗類が多数出土している（一色城跡下層遺跡）。

調査研究史　一色城跡については、江戸時代の史料に記載がある。古くは『寛文村々覚書』（1672年完成）に「古城跡壱ヶ所　先年橋本伊賀守居城之由、今ハ畑に成」とあり、橋本氏の居城であったことが判明する。さらに『張州府誌』（1752年完成）・『蓬州旧勝録』（1779年自序）・『尾張徇行記』（1822年完成）にも、「一色城」が片原一色村に所在することが記されている。また、近世の片原一色村の村絵図には現在の神明社から北側に古城跡が記されており、おおよその位置が推測できるが、その具体的な位置や規模については、近年になって明治時代の地籍図を用いて検討されるようになるまで不明であった。

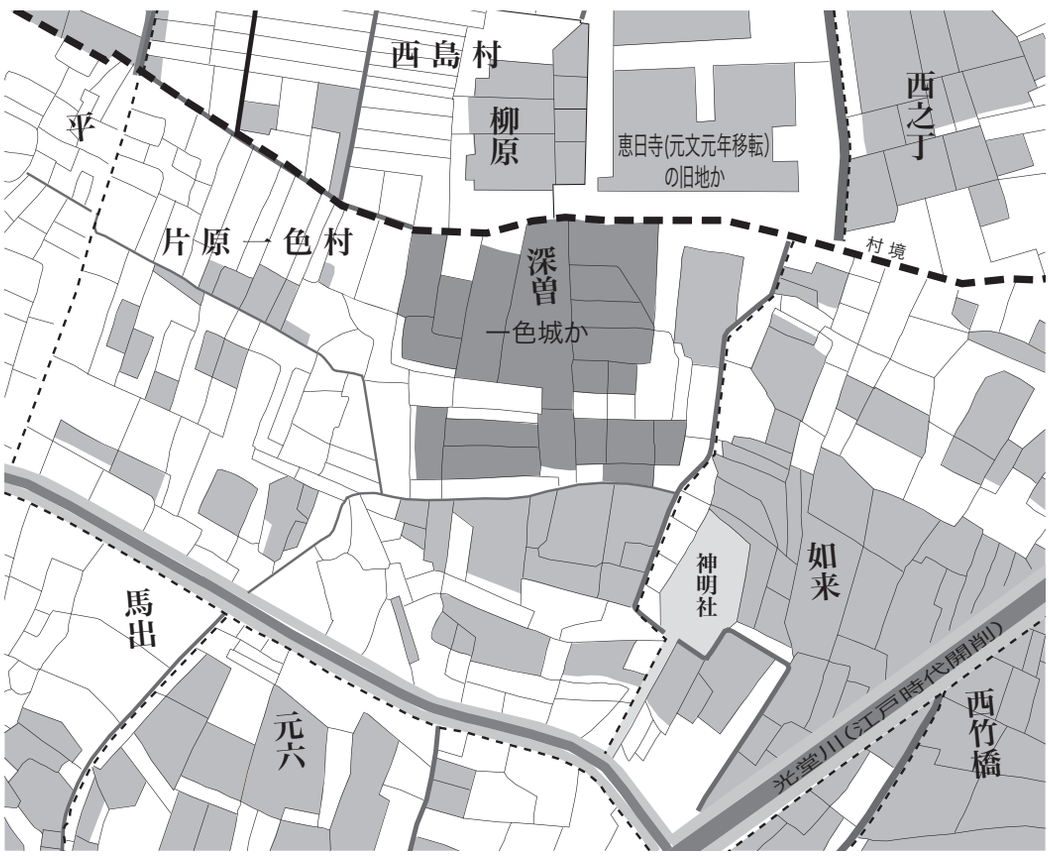
昨年度の発掘調査では、その調査区西端で幅約13m、深さ約1.5mの南北に延びる堀跡と、それが西方向へ屈曲する箇所も検出された。当該遺構の底面付近からは漆椀や若干の木片が出土している。漆椀は、炭素年代測定の結果も交えると16世紀代のものであり、堀跡が戦国時代に機能していた可能性がきわめて高い。これと地籍図による一色城跡の想定を合わせ、主郭東側の堀（東堀）と曲輪の北東隅に相当すると評価された。

一方、城主である橋本氏については、織田信長に鉄砲射撃を教授し、永禄元年（1559年）の岩倉城攻めに活躍した橋本一巴が『信長公記』に登場するが、一巴を含む8代が居たとされている（『片原一色村誌』）。橋本氏はやがて肥後の大名加藤氏に仕えてこの地を去り、通説では元和元年に廃城とされたとされている。

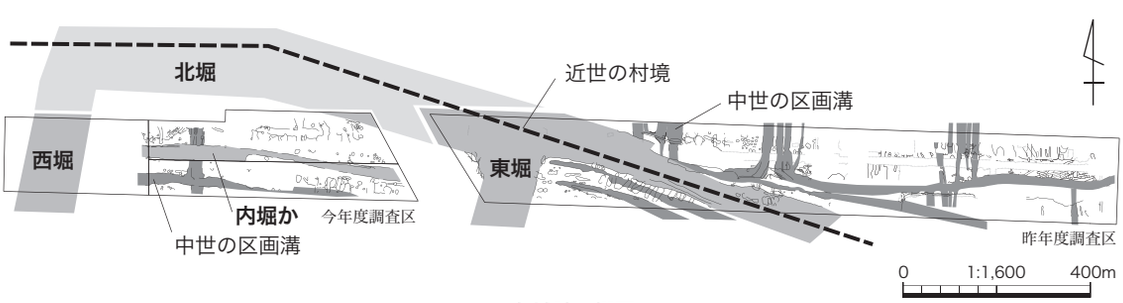
調査の概要　調査対象地は、昨年度検出した曲輪の北東角からさらに西側、主郭北縁部に相当すると予想された。発掘調査は20C区から着手し、同A区、同B区の順に進めた。

基本土層は、明黄褐色系砂質シルトを基盤層とし、その上面（検2面）で古墳時代前期～古代の遺構を検出した。これを覆う包含層は暗褐色系シルトで、にその上位に硬くしまった黄褐色シルトが最大で約0.6mの厚さで覆っている。当該層は山茶碗の小片を含んでいることやブロック状のシルトが混入するので、中世の整地層と思われる。当該層は概ね上下2層に区分され、上層が一色城の築城に伴うものと考えられ、その上面で大窯期の陶器が出土する遺構を検出した（検1面）。ただし、近世以降の削平が激しく、中世の整地層は今年度調査区の南東部のみで残存しており、それ以外では戦国時代の遺構も基盤層上面での検出となっている。

古墳時代　古墳時代前期の土師器は、調査区東半部を中心に包含層から小片で出土する傾向が強く、当該期の明確な遺構は少ない。しかし、053SD（C区）や193SD（A区）のような溝状遺構も若干ながら存在する。これらは屈曲部を有しており、周溝墓もしくは低墳丘墓の周溝であ



一色城跡周辺の明治時代地籍図（愛知県公文書館所蔵　中島郡西島村と片原一色村をトレースして合成）



一色城跡の概要

る可能性もあるが、例えば193SDでは、その南西側で当該期のピット（163SP・171SPなど）が比較的まとまってみられることから、集落の東限～北限を区画していた可能性も考えておきたい。

古　　代　古代の遺構は、調査区南東部で検出した。竪穴建物跡などの集落に関わる遺構が大半で、昨年度と同じく7世紀後半～8世紀を中心とする。また上位の包含層からではあるが、知多式製塩土器の脚部も出土している。包含層での須恵器出土は調査区東半部に集中しており、微高地の東～南東側斜面を集落域とする傾向があるとみられる。

中　　世　中世の遺構は、先述の暗褐色系シルトの上から掘り込まれた溝が主な遺構である。この溝は昨年度の調査区でも同様に検出され、東西方向の溝（176SD・181SD・182SD）を基軸に南北方向の溝（061SD・062SD・088SD）が交差している。また溝は直線にはならずに若干湾曲した形状で、何度も掘り返された結果、その底部は複数の小溝が並行する形状（例えば、176SDに対して下部の181SD・182SD）となっている。出土遺物はきわめて少ないが、中世後半にかけて機能していたと考えられる。以上のことから、これらの溝は屋敷地などの区画溝であったと思われる。

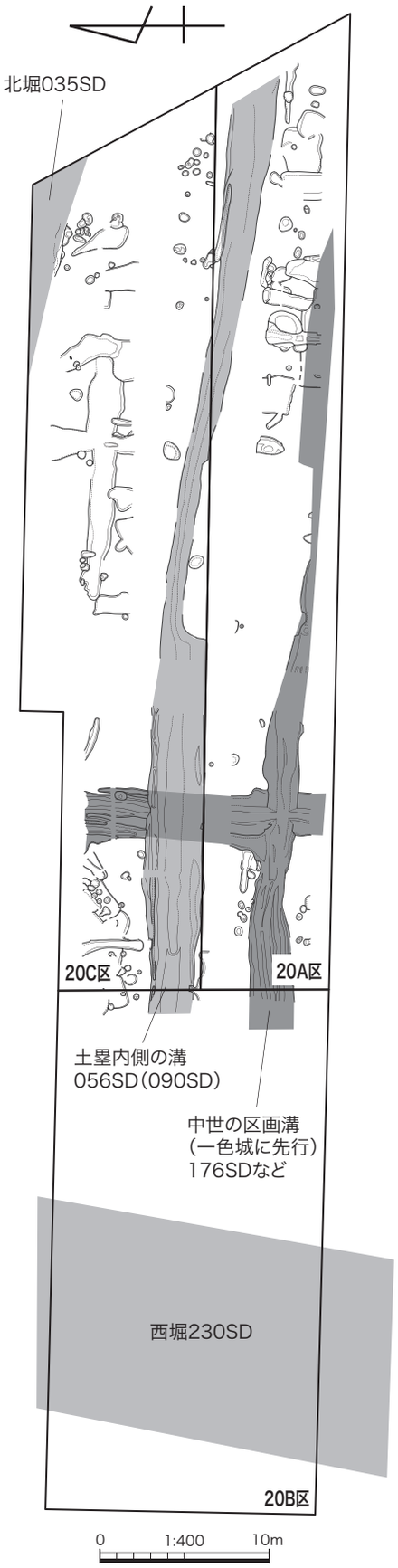
戦国時代　戦国時代、一色城跡に関する遺構は、先述のように削平部分が大きく、堀や溝など掘り込みが深い遺構に限られる。主なものとして、調査区西端に西堀230SDがあり、調査区を東西に貫くようにして溝状遺構056SD（090SD）が挙げられる。

西堀230SDは南北方向からやや東に振れた方位で延びており、昨年度検出された東堀の西側の上端に平行する。そこから230SD東側の上端までの距離は約84mである。230SDの幅は約8mを測り、東堀の幅が約13mであることから、84+8+13=約105mとなり、明治時代の地誌である『片原一色村誌』にあるように東西一丁の城域であったと推測することができる。230SDは上層が埋戻し後の灰褐色粘土で、下層は植物質を多く含む暗灰色粘土である。下層からは大窯期の天目茶碗や土師器煮炊具などが出土している。

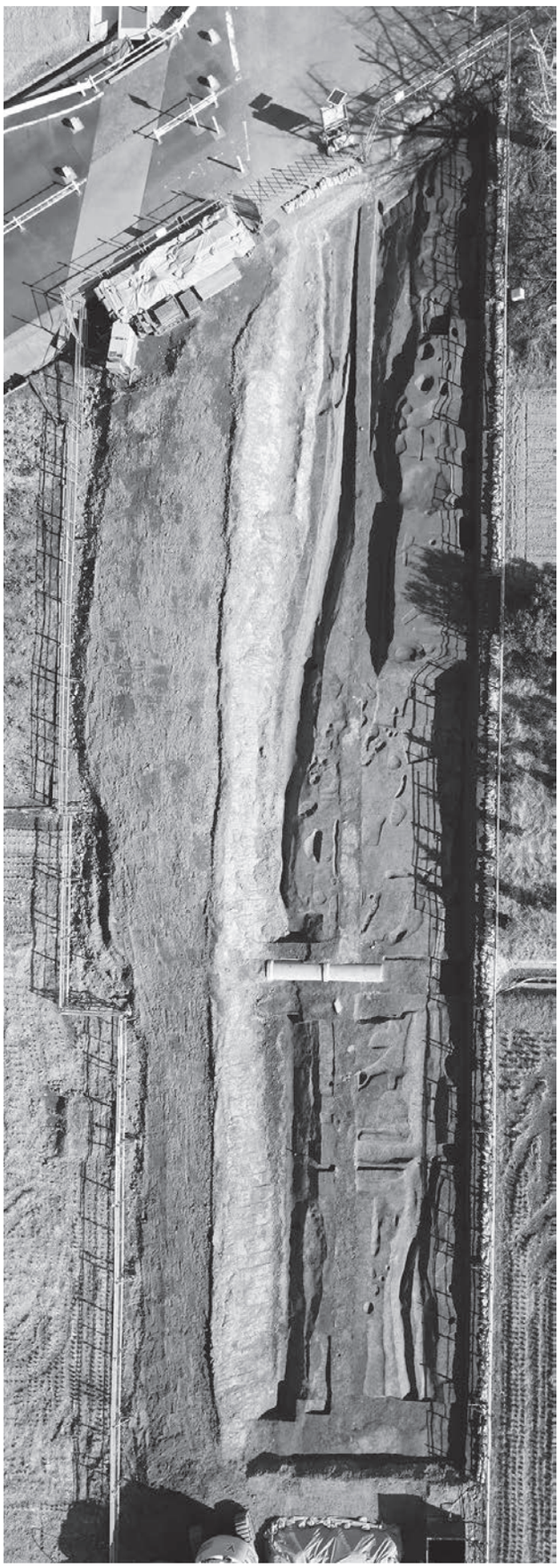
これに対して、東西溝056SD（090SD）は、検出した部分からすると約60m以上の規模で、最大幅約3.6m、深さ約0.8mを測る。ただし深さは削平された部分を加味すると約2mになると想定される。調査区西半部の056SDは断面が逆台形であるのに対し、東半部の090SDは薬研堀に近い断面形となっている。その形状が変化するあたりは撹乱によって不明瞭であるが、少しずつ性格が異なるのかもしれない。056SDからは天目茶碗や木片、090SDからは端反皿や焼けた板材（全長3.6m）、茶臼（下臼）片が出土しており、陶器の年代は概ね16世紀前半代を中心とする。埋土中の焼土や炭化物は、5cm大のブロック状のものが多く、燃やしたものを投棄したのかもしれない。

056SD（090SD）から南側では、中世整地層の上で陶器類や土師器皿が出土する小溝や土坑を検出したが、同溝から北側ではそれがほとんどない。このことから、056SD（090SD）北側には北堀に伴う土塁があったと推測され、056SD(090SD）は、土塁と屋敷地を区画する堀（内堀か）であった可能性がある。

ま と め　以上のように、今年度の調査区では戦国時代の一色城に関わる多数の遺構と遺物を検出することができた。また、それらが廃棄された時期は橋本一巴の活動していた時期に重なり、橋本氏が一色城を拠点にどのような活動をしていたのか、具体的な資料に基づく分析が可能になった。また下層の遺構については、昨年度の成果も合わせて中嶋郡域に分布する古代集落の一つを明らかにすることができた。（永井邦仁）



主要遺構（上面）



20A区空撮時の状況

みなみやまちょう 南山町遺跡（本発掘調査B）

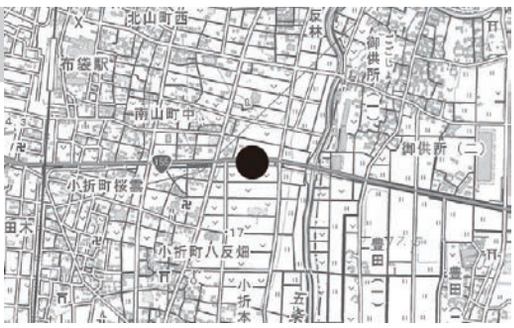
所 在 地 江南市南山町東地内
（北緯35度18分51秒 東経136度52分50秒）

調査理由 一般国道155号道路改良工事

調査期間 令和2年7月～令和2年10月

調査面積 1,040㎡

担 当 者 池本正明・武部真木



調査地点（1/2.5万「小牧」）

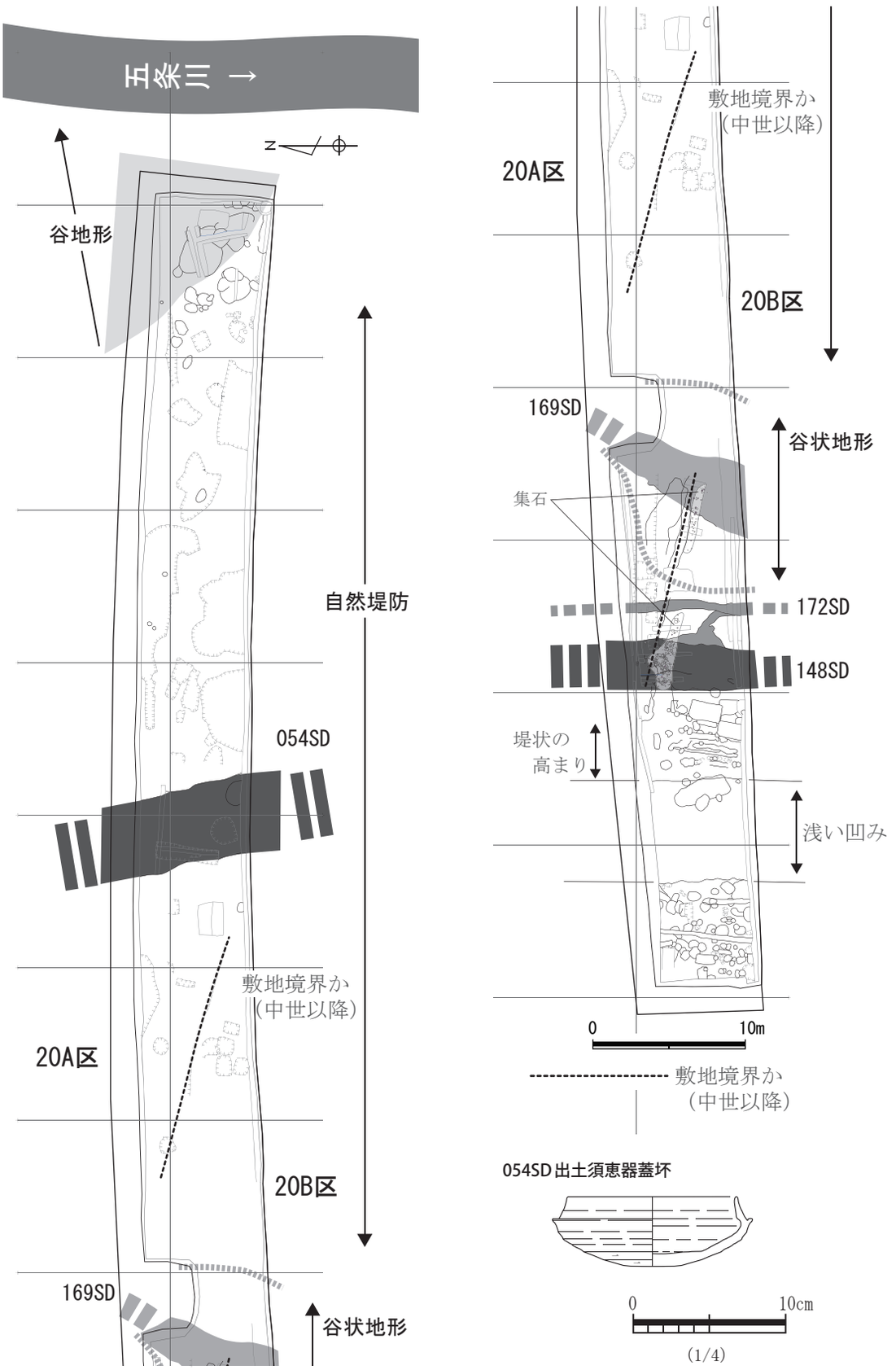
調査の経過 調査は、一般国道155号道路改良工事に伴うものであり、愛知県建設局道路建設課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行った。調査対象地は現道南側の拡張部分にあたり、東西方向に約100mとなる長方形の調査範囲について、東から20A・20B区の２区に分割して行った。調査面積は計1,040㎡である。

立地と環境 遺跡の所在する江南市は、尾張北部の犬山扇状地の扇央部に立地する。調査遺跡は市域の南東部にあたり、隣接する大口町との境界に近い五条川右岸の標高約16mの自然堤防上に立地する。周辺一帯には多数の古墳が分布し、調査地点のすぐ北側には『尾張名所図会』にも記載のある富士塚古墳、南東方向約1.0kmには全長約60mの規模をもつ6世紀の前方後円墳、曽本二子山古墳などがみられる。なお、同事業に伴う遺跡調査は前年度より行われており、五条川対岸の大口町・白木遺跡では飛鳥～奈良時代の竪穴建物、掘立柱建物が展開する集落跡が見つかっている。

調査の概要 今回の調査範囲は、南流する五条川に対して直交する方位となり、五条川右岸の自然堤防および後背湿地の地形を横断する形となった。犬山と岩倉方面を結ぶ柳街道（岩倉街道）が富士塚古墳の西側を通り、調査区が含まれる南東側の河川寄りの範囲には緩やかに起伏する畑地が広がっており、土器、須恵器、陶磁器細片などが耕作土中に多数含まれている。遺構が検出されたのは、20A区の東端と中央付近の一部、20B区の範囲であり、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の遺物が出土している。

２０Ａ区 表土を除去するとすぐに基盤層（砂質シルト層）に達する。東端付近は五条川にかけて傾斜する谷地形があり、削平を免れた部分では耕作等に関連すると思われる不整形の土坑が確認された。埋土には炭化物粒、土器、須恵器、山茶碗、中世・近世陶磁器の小片などが混在する。全体では旧地形の自然堤防の高まりが標高16mのレベルで削平されており、周辺から運ばれた覆土から8世紀を中心とした須恵器が出土している。明確な遺構としては大型の溝がある。溝（054SD）は概ね南北方向に延び、残存部分は幅4.9m、深さ0.8mあり、断面では西側の立ち上がりがやや急となる皿状を呈する。南・北壁断面で埋土の堆積状況に違いがみられ掘り返しがあったと考えられる。最下層では台付甕や高坏などの3世紀後半～4世紀初め頃の古墳時代土師器、中層では7世紀前半頃の須恵器蓋坏（1点）、上層では8世紀代の須恵器杯や蓋が複数出土している。堆積層はシルト層・細粒砂層を基本として、南壁では中位にやや厚い砂層が含まれる。近在住民によれば、20A区付近にはかつて（子供の頃に）は「川に沿って山のような高まり」があり、また近年まで墓があったという。

２０Ｂ区 調査範囲東端より続く自然堤防の西側傾斜面から後背湿地の地形が含まれる。ここでは自然堤防は東西方向で幅約70mを測り、その西側は約1.0mの褐色砂質シルト層（耕作土）が堆積する。その下に最深部（旧流路169SD）標高が14.5mとなる埋没した谷状地形が



主要遺構配置図 (S=1/400)

約20mの幅で確認された。20B区で検出された遺構には、上面では北西-南東西方向にのびる円礫の集石（089～092SU、115SX）、幅約5.0mの南北方向の堤状の高まり、また下面では谷状地形が埋積する過程で掘削された南北方向の溝（172SD,148SD）などがある。

集石は２ヶ所に分かれて検出された。西側（089～092SU）は長さ4.0m、幅は広い部分で1.2mを測り、断面でも溝状の掘り方などは確認できない。大小の円礫が斜面に重なり、周囲からは須恵器杯・平瓶・長頸瓶、灰釉陶器椀、土師器鍋、山茶碗などが出土する。東側（115SX）は長さ4.5mにわたり径10cm程度の円礫と山茶碗・小皿が疎らに並ぶもので、幅は一定しない。これらは石材のサイズや分布、出土遺物などで様相が異なるものの、直線的に連続する方位・検出レベルとなっており、耕作時に集められた周縁部、敷地境の痕跡かと考えられる。

集石列の西端に接する堤状の高まりは盛土ではなく、基盤層が高く残っている部分である。上端部では、平行する溝状の耕作痕や大量の円礫が入る土坑や現代の撹乱も確認され、近年まで大畔や道として利用されていたと考えられる。堤状高まりの西側は地表から約70cmまで耕作により撹拌されており、その下では幅6mほどの浅い凹みのほか、多数の土坑・ピット状の凹み、溝などを基盤層上で検出した。埋土はいずれも短期間に埋められた状況を呈しており、遺物はほとんど含まれない。耕作に関わる痕跡かと考えられる。

溝（172SD,148SD）は、堤状の高まりとほぼ並行するように下層の谷状地形の西縁に確認された。148SDは幅3.0m、深さ0.8m、172SDは最下層の幅0.6mを検出したが、北壁断面では幅1.1m、深さ0.6mが確認できる。谷地形全体を覆う砂混じりの粘土層は上位が撹拌されており、直上のシルト層は灰釉陶器を含み、これらの溝の上部をも削平している。溝埋土の下層はともにブロック状に粘土が混じる砂層、沈鉄層が認められ、148SDでは台付甕など古墳時代土師器と灰釉陶器が出土している。両者の間にも溝の痕跡があり自然流路の可能性も考えられる。

ま と め　これまでに市域の発掘調査事例は少なく、周辺に多数分布する古墳の造営に関わる集落遺跡等の実態についても不明瞭な地域であった。調査で確認された遺構・遺物等は決して多くはないものの、扇状地という地形・地質の特質に応じた土地利用法の変遷が窺われた。ここでは4世紀初頭の古墳時代以降、あるいは少なくとも8世紀頃までには集落が営まれる程度に安定した環境があったと推測される。また耕作土中とはいえ、土器・須恵器・山茶碗片などの遺物が周辺一帯に広く分布しており、特に古代以降に開発が活発化していったと推測される。（武部真木）



20B区全景（北から）



遺跡遠景と五条川（北から）



20A区054SD（南東から）



20B区集石検出状況（西側）



20A区出土須恵器杯



20B区西端付近の 土坑・溝（東から）



20B区堤状高まり（北から）



20B区谷状地形断面（北東から）



20B区148SD・172SD（北東から）

断夫山古墳（本発掘調査B）

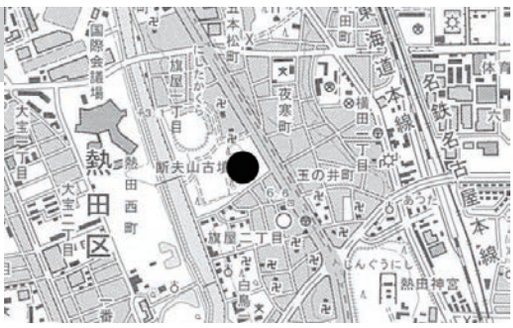
所 在 地　名古屋市熱田区旗屋町一丁目
（北緯35度07分52秒 東経136度54分14秒）

調査理由　史跡断夫山古墳整備事業

調査期間　令和2年11月～令和3年1月

調査面積　90㎡

担 当 者　池本正明・武部真木



調査地点（1/2.5万「名古屋南部」）

調査の経過　愛知県と名古屋市が共同主体となる史跡調査事業に関連する学術調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて行った。調査は、史跡として指定されていない周濠・周堤を調査し、古墳の正確な範囲を確認するための基礎的な情報を得ることを目的とし、今年度は墳丘東側の熱田神宮公園内に90㎡の面積が設定された。

立地と環境　断夫山古墳は名古屋城付近を北端として南へ舌状にのびる洪積台地（熱田台地）の南端西縁辺（標高約6m）に立地する。北から北東側にかけては高蔵遺跡、高蔵古墳群、東側に玉ノ井遺跡、南側には6世紀初頭の築造とされる白鳥古墳など弥生～古墳時代の遺跡が濃密に分布し、南東側には熱田神宮が位置する。加えて地籍図の記載を元にすると、調査区付近は昭和17年に移転した観聴寺（浄土宗）の敷地であったと考えられる。



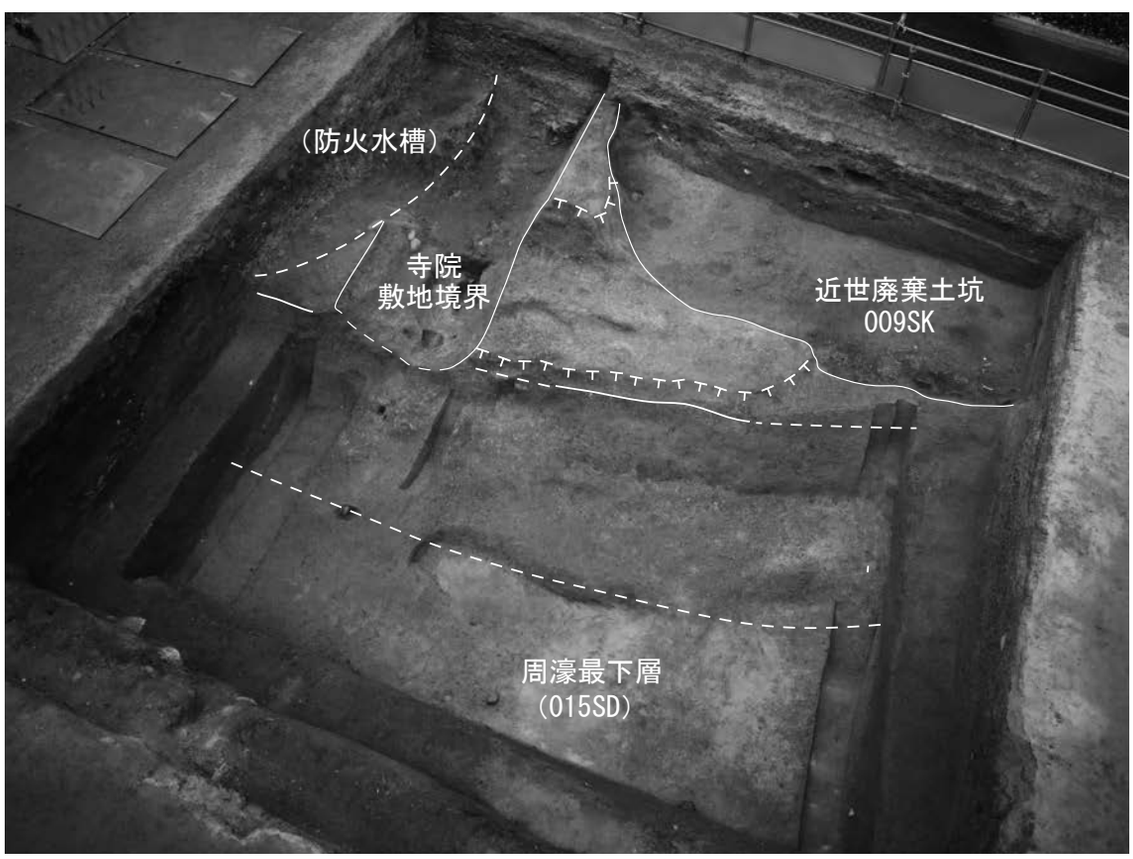
断夫山古墳の史跡範囲と調査地点（S=1/1500）

調査の概要　今回の調査により確認された主な遺構は、近代の整地層と建物礎石、寺院敷地境界に関わる溝・護岸石垣、建物礎石、近世（19世紀第２四半期）の陶磁器類や瓦を含む大型の廃棄土坑（009SK）、そして断夫山古墳の周濠（015SD）の東側立ち上がり部分（外側斜面）である。

ここでは周濠について記載する。古墳周濠は熱田台地を掘りくぼめて造られており、今回の調査範囲内では最深部で標高3.5m、削平を免れた調査区東端付近で基盤層の標高は5.8mあり、比高差は2.3mとなる。南壁断面では後世の改変が標高4.0mの深さまで及んでいることが確認でき、この掘削部分の最下部は水平に東側の熱田層をも削り込みテラス部分を形成している。その下から墳丘に向かって傾斜する堆積層（015SD）より須恵質・土師質の埴輪片、土錘（1点）、長径15cm前後の円礫が出土した。

周濠上部は削平が著しく、斜面形状や周堤の有無は今回の範囲内では確認できない。また、基盤層で確認できる周濠の立ち上がり部分は、直立に近い急角度となっている。この部分を埋めるかのようにブロック状の粘土・土を含む硬く締まった堆積層があり、北壁断面では斜面を形成し埴輪片を含む埋土がその上に堆積していることが確認できる。外側斜面下端のこの堆積層には摩滅した土器小片が混じり、条痕文土器、廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式期高坏などが認められるが、埴輪片は含まれない。これまでのところ、底面付近は周濠本来の形状を残していると思われる。

ま と め　今回の調査により断夫山古墳の周濠の存在が初めて明らかとなり、その規模は深さ2.3m以上となることが確認された。調査区が設定された墳丘東側は古くからの主要街道に面する場所であり、特に上部は大きく影響を受けている。古墳周濠・周堤の詳細な形状の判断にはさらに慎重な検討が必要である。（武部真木）



調査区全景（南西方向から撮影）

亀塚（かめづか）遺跡（本発掘調査B）

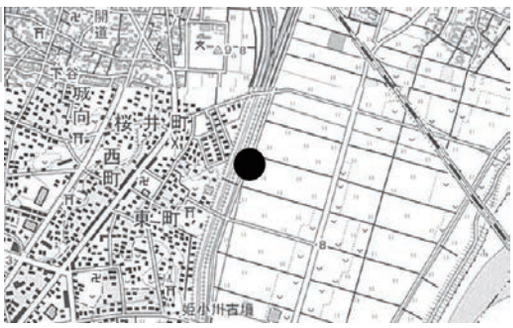
所在地 安城市桜井町・東町地内
（北緯34度55分05秒 東経137度05分53秒）

調査理由 中小河川改良事業（鹿乗川）

調査期間 令和2年6月～令和2年8月

調査面積 567㎡

担当者 池本正明・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城」）

調査の経過

調査は、愛知県建設局河川課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行なった。亀塚遺跡は、昭和48年度と同52年度、平成10年度に安城市教育委員会による発掘調査が行われている。昭和52年の第2次調査では人面文壺形土器が出土しており、国指定重要文化財となっている。当センターでは、平成10年度より鹿乗川流域での発掘調査を行っており、この時は、今年度の発掘調査区（20A区）の東方で鉄塔移設に伴う小規模な調査が行われている（10A区）。その後、平成28年度からは鹿乗川の河川改良工事に伴う発掘調査が亀塚遺跡でも始まり（16A区）、令和元年度の調査区（19区）では、古墳時代前期までに湿地化した旧河道003NRが検出され、多量の土器や赤彩された盾を含む木製品が出土している。昨年度と同様に事業用地内で先行する導水管工事に関わる範囲を対象として、幅4mのトレンチ状の調査区となった。北から20A・B区、19区を挟んで20C区である。

立地と環境

遺跡は、安城市東部の沖積地に所在する。碧海台地東縁の段丘崖下を南下する鹿乗川に沿って、多数の遺跡が連続して分布しており、鹿乗川流域遺跡群の特徴となっている。また、その大半は弥生～古墳時代に最盛期となる集落遺跡である。これらの立地する微高地は、弥生時代まで水流のあった幅約30mの旧河道に伴う自然堤防である。先述のように、旧河道は古墳時代前期までに大半が埋没しており、それと集落の衰退とが連動しているようにみえる。亀塚遺跡では、埋文センターの19区と安城市教育委員会の第1次調査区で北西～南東方向の旧河道が確認されており、そこから北東側が微高地であると考えられ、20A・B区はそこに該当する。微高地の基盤層は、最上層が明黄褐色系の砂質シルトで下層は河川堆積の細粒砂層となっている。なお亀塚遺跡周辺では、北側に中狭間遺跡をはじめとする遺跡群があり、対して南側には向田遺跡がある。向田遺跡西側の台地上には古墳時代前期の獅子塚古墳が立地する。

調査の概要

20A区

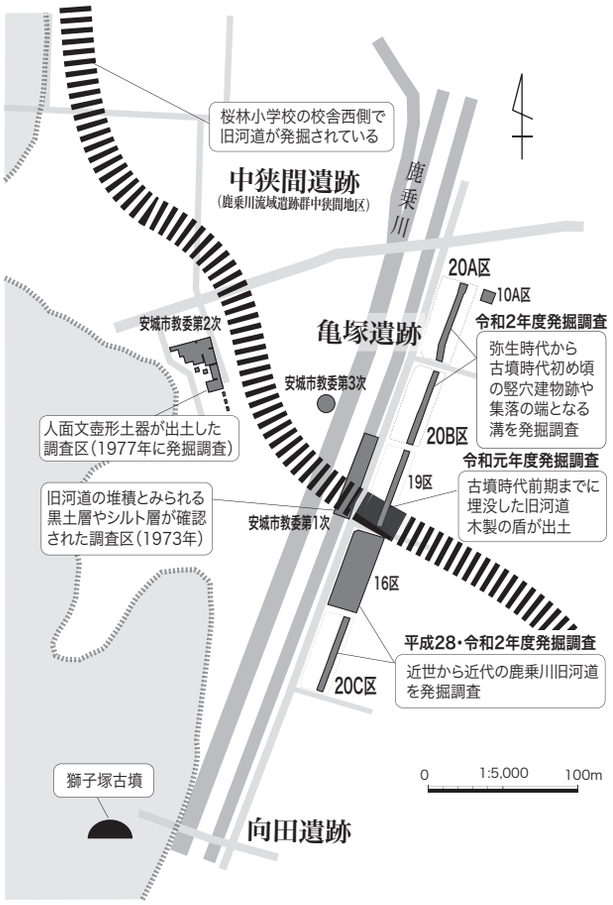
20A区は、その中～南部が微高地の頂部に相当し、南側の20B区北部まで続いている。この間、遺構面（基盤層）は地表面（耕作面）から約0.2m下ときわめて浅く、鹿乗川流域で広範にみられる黒褐色シルト遺物包含層が削平されている状況からすると、微高地の頂部はさらに高く、すでに削平された遺構・遺物も想定される。主な遺構の時期は、弥生時代中期後葉から平安時代までであるが、中世～近代の溝（22SD・23SDなど）もある。

A区北部では、最古段階の遺構である溝168SDの底からは古井式（弥生時代中期後葉）の斜格子文壺が出土している。168SDは幅2.8mで断面が逆台形をしており、北西～南東方向に延びているが、これは旧河道003NRの方向に平行である。168SDの南側にはこれと直交する溝31SDがあり、その南端は屈曲している。この形状から周溝墓（もしくは墳丘墓）の可能性が考えられる。さらに31SDは溝18SDに切られており、その交差付近からは弥生

土器が多量に出土している。所属遺構については検討が必要である。また調査区南端には溝55SDがありこれも屈曲部を伴っており、周溝墓の可能性がある。

A区北部には隅丸方形の土坑07SKがある。垂直な掘方の形状がよく残っている。複数の炭化物層があり、同層からは弥生土器が出土している。弥生土器は凹線文系が含まれる。07SKと同形状の土坑は、これに切られる土坑08SKなどその周辺に集中している。

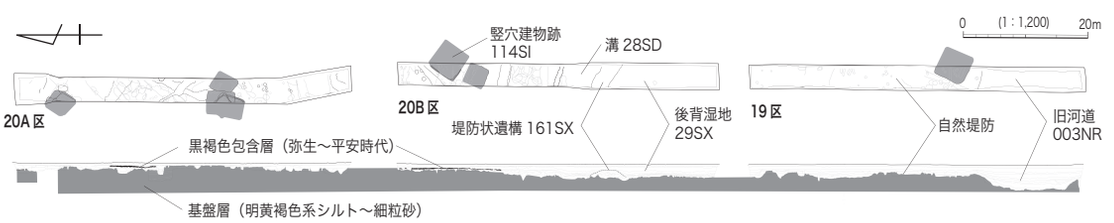
竪穴建物跡は09SIや158SIで幅約0.1mの壁溝を検出しているが、検出面から床面まで数cmしか残存していないものもあり、結果的に遺物の出土もほとんどないので時期の特定はできなかった。ただし16SI・158SI・159SIは遺構の切り合いから周溝墓31SD（先述）より後となることから、弥生時代後期～終末期と考えられる。竪穴建物跡群の南側では深さ20cm以上のピットが約10基検出された（44SPなど）。これらは、一部（60SPなど）では断面で柱痕がみえるので、掘立柱建物跡を構成するとみられる。



遺跡の概要



20A・B区全景（南から）



亀塚遺跡（20A区～19区）の基本土層断面（1:1,200、ただし垂直方向は2倍に拡大）

遺跡の概要と基本土層

調査区北端の溝02・03SDは、幅約2mで断面が皿状を呈しており、それぞれ8世紀半ばの須恵器と9世紀後半の灰釉陶器が出土している。須恵器杯の底部外面には1文字の墨書がある（未判読）。なお、亀塚遺跡全体でみると古代の遺構や遺物は少ない。

20B区　20B区は、A区から続く微高地頂部が南部へ向かって下り傾斜となっている。B区南部は、黒褐色シルトが水平に堆積する不明遺構29SXであるが、人為的な掘り込みがみられないことから19区の旧河道003NRに伴う後背湿地の可能性がある。その北端には、一部が盛土で構築されたとみられる堤防状遺構161SXがある。少なくとも161SXの上半部は29SX堆積層を覆っており、特に表層部分で山中式期新段階～欠山式期の弥生土器を多量に含んでいる。土器は、161SX北側斜面すなわち大溝28SDに沿って集中する傾向にある。

大溝28SDは、幅約7m、深さ約0.6mの皿状で、幅に対して平らで浅い底面となっており、埋土は暗褐色系のシルトであるが堤防状遺構161SXほどの土器集中はない。28SDは、基盤層の砂層まで掘り抜かれていないことや、南側の不明遺構029SXとの間に161SXがあることから、水を避けた道路だった可能性もある。また、28SDの下位で同一方向の溝194SDが検出されており、28SD以前は溝195SDとともに集落南限を区画していた可能性がある。その195SDは断面が薬研堀形で、環濠を思わせる。埋土の半ばに土器片が集中し、山中式期とみられる。注意すべきは、その検出面が28SDより1層下であることで、埋没した195SDなどが削平されてから28SDへ至る変遷が想定される。

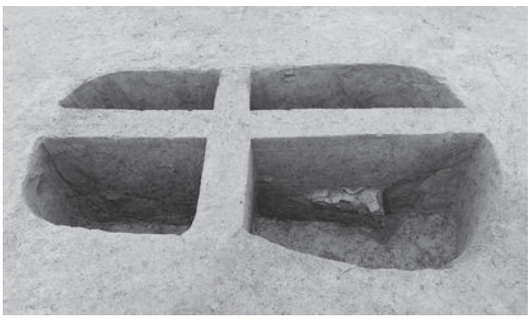
竪穴建物跡は3基検出した。114SIは切り合い関係で最上位にあり、検出時にほぼ床面の状態であったが、その全面に炭化物が散布しているのが特徴である。遺物は寡少ながら欠山式期と考えられる。114SI・118SIから南側では建物遺構が希薄となり、緩い下り傾斜となっている。また195SDのすぐ北側では、1層下の検出面で焼土・炭化物の多い竪穴建物跡205SIを検出した。

上記以外には、溝（84SD・100SD）やピット（81SP～83SP、111SP）などを検出した。前者は遺構の切り合い関係で一番新しい時期に位置付けられる。84SDは旧河道003NRと直交する方位で、100SDはこれらとは関係なくほぼ東西方向に延びている。遺物は弥生土器・土師器に限られる。一方、B区北部のピット群は20A区で検出されたものと同様の規模であり、掘立柱建物跡を構成すると考えられる。

20C区　20C区では、調査区全体で地表面下約2mまで粘土から粗粒砂で構成される互層となっており、他の調査区でみられるシルト主体の基盤層はほとんどなかった。また、層中からは打ち込まれた木杭や近世後半以降の常滑産甕が出土している。このことから近世～近代の鹿乗川旧河道と考えられる。北側の16区でも南西部を中心に同様の層が確認されており、検出されたのは旧河道が北西から南東方向へカーブする箇所であると考えられる。

まとめ　以上のように亀塚遺跡20A・B区では、弥生時代中期～終末期に営まれた集落の一端を確認した。竪穴建物や掘立柱建物で構成される居住域の南縁は、溝や堤防状施設で区画され、旧河道に沿って西縁へ続いていたとみられる。このことから検出された集落は、1977年に人面文壺形土器が出土した地点とは旧河道を挟んだ別の区域である可能性が高くなった。また、微高地頂部が20A・B区から東方へ広がっている可能性が高く、集落域の形状も寄島遺跡のような南北長い楕円形ではなく、東西にも展開するより正円形に近いものと推測される。

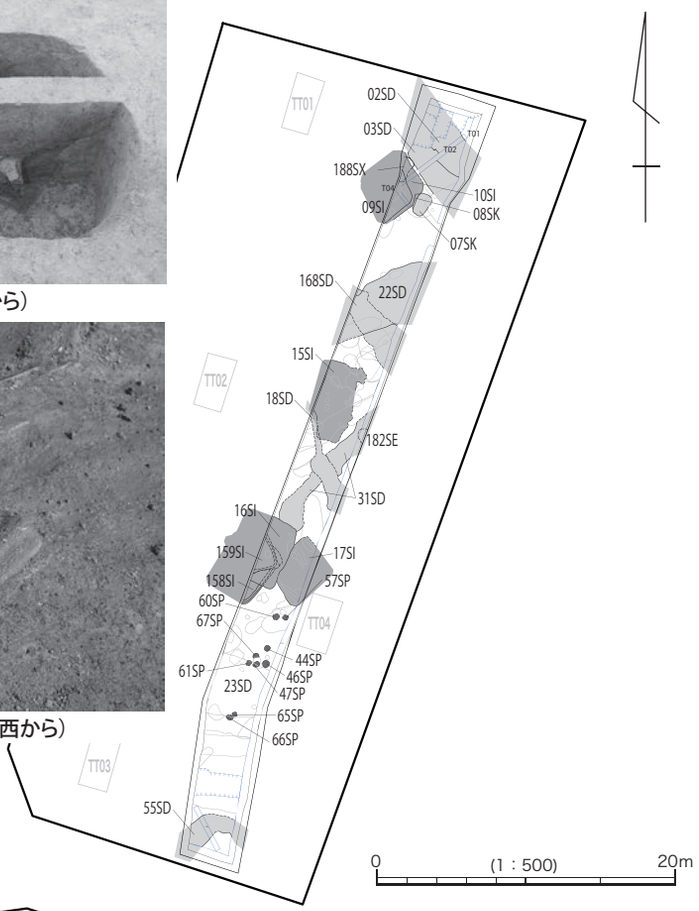
（永井邦仁）



土坑07SK土層断面（東から）



溝168SD弥生土器出土状況（西から）

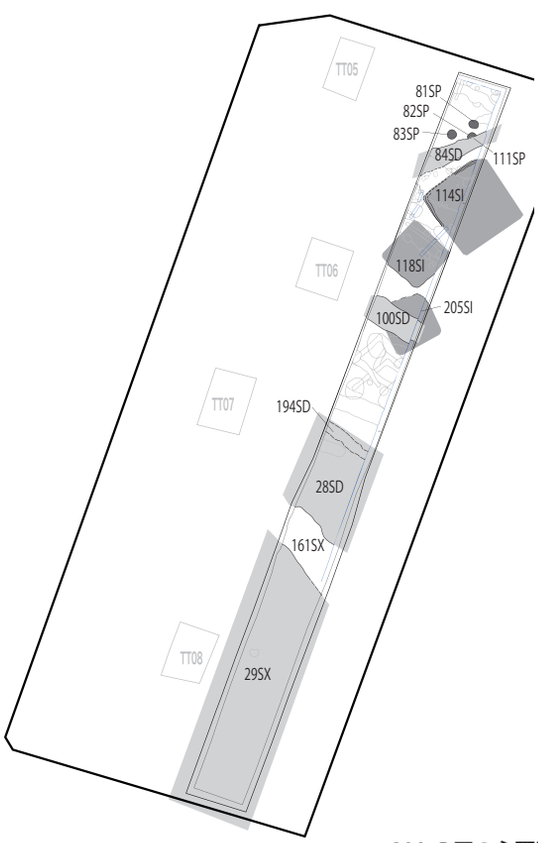




竪穴建物跡114SI床面遺構検出状況（南東から）



堤防状遺構161SX遺物出土状況（北東から）



20A・B区の主要遺構分布

中狭間（なかはざま）遺跡（本発掘調査A）

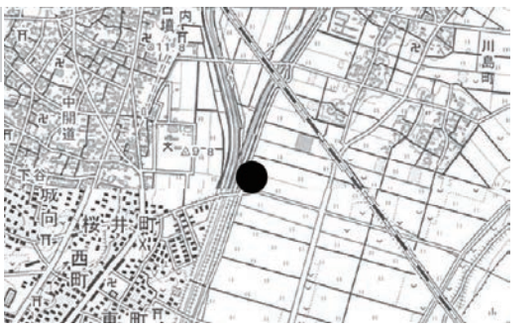
所在地　安城市桜井町地内
（北緯34度55分21秒 東経137度05分58秒）

調査理由　中小河川改良事業（鹿乗川）

調査期間　令和2年6月

調査面積　96㎡

担当者　池本正明・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局河川課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行なった。調査対象地は、亀塚遺跡北方の昨年度新たに事業用地となった4か所の区画（総計6,390㎡）で、2m×3mのテストトレンチ（TT）を総計16か所設定して遺構と遺物を検出するとともに土層の状況を確認した。TTの番号は北からTT01～TT16である。

立地と環境　遺跡は安城市東部の沖積低地に立地し、鹿乗川流域遺跡群の中狭間地区として安城市教育委員会による発掘調査がなされているが、鹿乗川左岸での遺跡の展開やその立地する微高地の形状については不明であった。

調査の概要　TT01～04では、表土と近世耕作土下で厚さ0.1～0.3mの黒褐色シルトがあり、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗を包含する。同層は鹿乗川流域で広範に認められるが、当該地点では比較的厚いのが特徴である。同層下は黄褐色系シルトの基盤層で、その上面で遺構（TT01の竪穴状遺構01SI、TT04の溝09SDなど）を検出した。

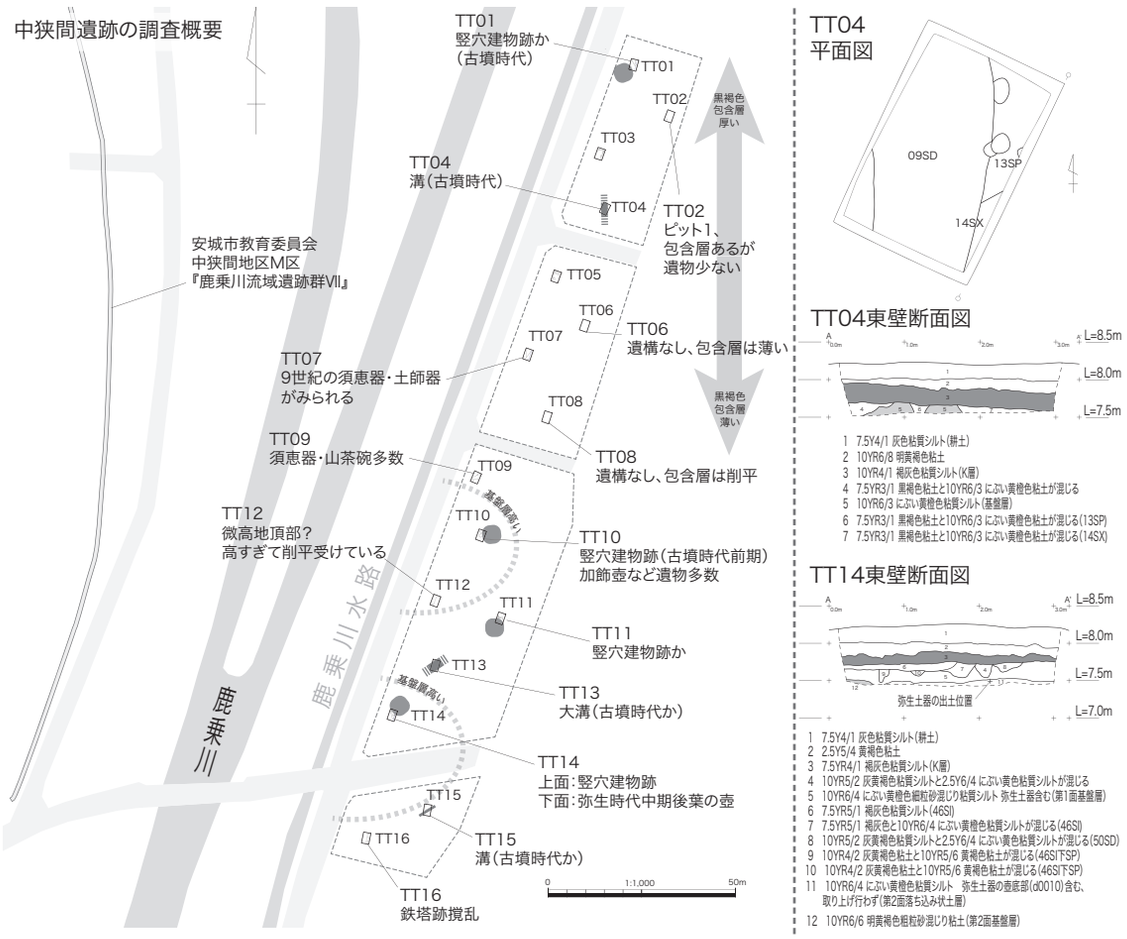
TT05～08では、先述の黒褐色の遺物包含層が希薄になるが、基盤層の標高が7.6m以上と周囲より高くなっていることから、後世の削平を受けやすかったものと思われる。TT07の不明遺構27SXからは9世紀後半の須恵器椀が出土している。なお、TT02・06・08は調査対象地の東寄りに設定したが、これらのTTでは遺構・遺物ともに希薄になる。このことから、当該地点が集落域の東縁に相当すると考えられる。

TT09～12はさらに基盤層が高く（TT10で標高7.7m）、黒褐色の遺物包含層はほとんどみられないが、TT09では須恵器瓶類と山茶碗類が多数出土し、TT10では竪穴建物跡43SIの西辺を検出した。後者の埋土からは加飾壺や台付鉢などがまとまって出土しており、古墳時代前期と考えられる。TT11では、竪穴建物跡の可能性がある42SXを検出した。TT12は基盤層の砂質が強いことから、微高地の最頂部に相当するとみられる。

TT13は凹地とみられ、南西から北東方向の溝45SD（深さ約0.5m、土師器出土）を検出した。その南側のTT14は再び基盤層が高くなる。遺構面は2面以上あり、上面では竪穴建物跡46SI（古墳時代以降）を検出した。その基盤層となる黄褐色シルト層中には弥生土器が含まれ、上面から約0.2m下で古井式（弥生時代中期後葉）の壺が逆位で出土している。この壺は、出土状況から埋納されたと考えられることから、黄褐色シルトが掘方の埋土となる下面の遺構が存在することが指摘できる。

TT15・16はやや凹地となっており、TT15では土師器の出土する溝52SDを検出した。亀塚遺跡の集落とはこの辺りで境界になると思われる。

ま と め　以上のように、鹿乗川左岸では微高地は東方へ下り傾斜となっているが、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする集落遺跡が濃密に広がっていることが確認できた。また弥生時代中期以前についても注意すべき点が多いと考えられる。（永井邦仁）

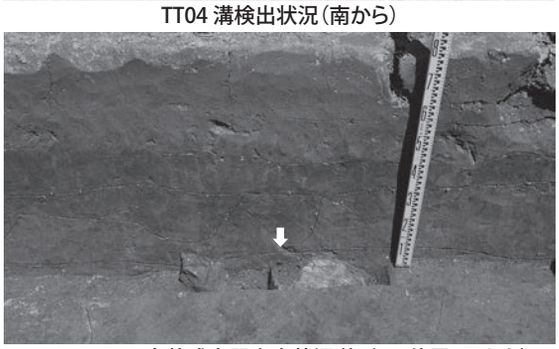




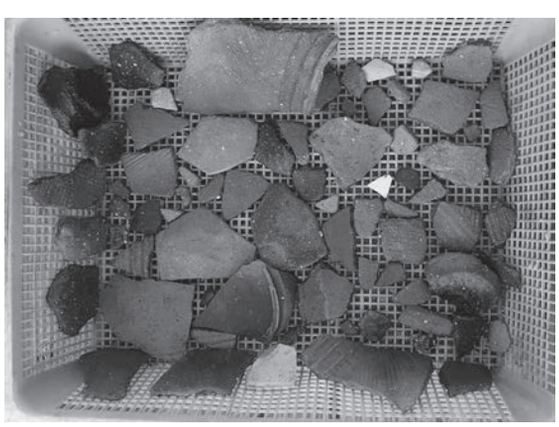
TT04 溝検出状況（南から）



TT10竪穴建物跡内の遺物出土状況（東から）



TT14 下面の古井式土器出土状況（矢印の位置、西から）



TT14 出土遺物（弥生時代中期～江戸時代）

姫下（ひめした）遺跡（本発掘調査A）

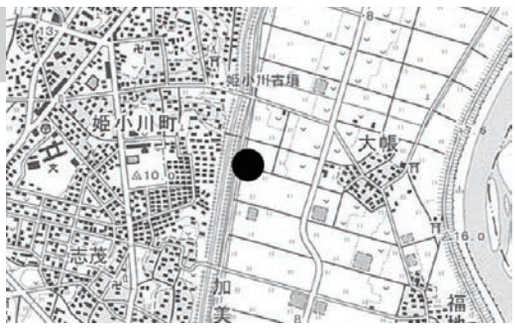
所在地 安城市姫小川町地内
（北緯34度54分45秒 東経137度05分47秒）

調査理由 中小河川改良事業（鹿乗川）

調査期間 令和2年6月

調査面積 12㎡

担当者 池本正明・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局河川課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行なった。鹿乗川および同排水路左岸の、昨年度新たに事業用地となった1区画（620㎡）を対象として、2m×3mのテストトレンチ(TT)を計2か所に設定し、遺構と遺物を検出するとともに土層の状況を確認した。

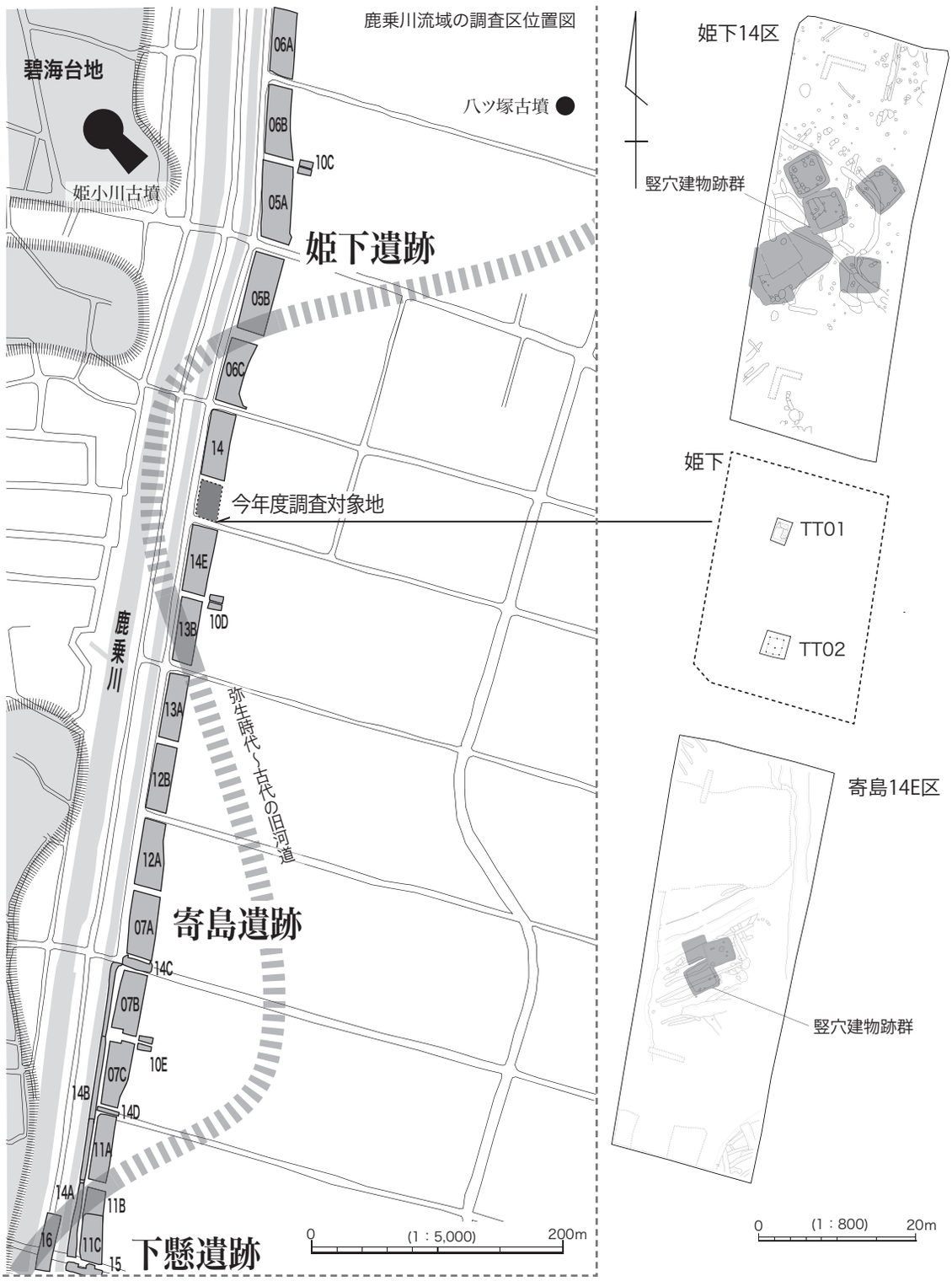
立地と環境　遺跡は安城市東部の沖積低地にあり、調査対象地の標高は7.8～8.0mである。姫下遺跡は、碧海台地東縁を南北に流れる鹿乗川の現河道左岸に展開する鹿乗川流域遺跡群に含まれる。調査対象地の区画は姫下遺跡の南端に相当し、南隣の区画は寄島遺跡の範囲とされている。これまでの発掘調査によって、寄島遺跡は弥生時代中期～古墳時代初頭、姫下遺跡は古墳時代前期をそれぞれ中心とする集落遺跡であることが判明している。なお鹿乗川右岸の台地上には、古墳時代前期の姫小川古墳が立地する。

調査の概要　TT01は、地表面下約0.5mで褐灰色の粘質シルト層（近世の耕作土）があり、さらにその下約0.5mで古墳時代の土師器から中世の山茶碗を多量に含む不整形な土坑01SXを検出した。ただし当該遺構は埋土がブロック状を呈するシルトが主体であることから、近世段階の埋め戻しを伴う何らかの造成痕である可能性がある。そして01SXの下位には、基盤層である粘質シルトの上面で土坑02SXを検出した。02SXからは古墳時代の土師器と若干の須恵器が出土することから、当該期の集落に関わる遺構と考えられる。

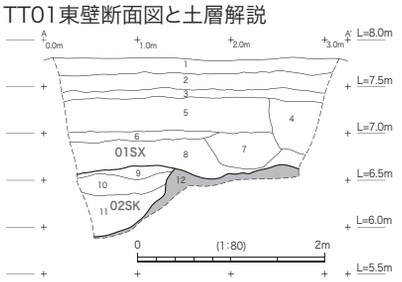
TT02は、地表面下約2.0mまで粘土や細粒砂の互層が続き、標高約6.3mで白色の粗粒砂層上面となる。遺物は古墳時代の土師器が若干みられるのみである。当該地点は、1930年代の『碧海郡桜井村土地宝典』によれば、東西方向の用水路があったと考えられる。また、その東側には「野池」「西野池」という字があり、時期をさかのぼると、ため池または湿地帯であった可能性がある。東西方向の用水路を挟んで北が「姫下」南が「寄島」に分かれており、凹地地形が字界の根拠になったと推測される。

ま と め　南北両区画（姫下14区・寄島14E区）では、調査区の広範囲にわたって撹乱や耕作痕跡（小溝）がみられ、集落遺構が大きく抉り取られている。その一方で、基盤層が残存している部分では、古墳時代初頭～前期の竪穴建物跡群が密集して分布していることが明らかになっている。したがって、今次発掘調査のTTでは明瞭な建物遺構の検出ができなかったものの、集落域内である可能性は高い。

また、今次発掘調査によって、亀塚遺跡から南に位置する鹿乗川沿いの事業用地における遺跡の範囲に関わる検証に一区切りがついた。結果、途切れるところが極めて少ない南北方向に連続する、弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡群という実態を確認するに至った。この実態こそ、鹿乗川流域遺跡群の最大の特徴といえる。　（永井邦仁）



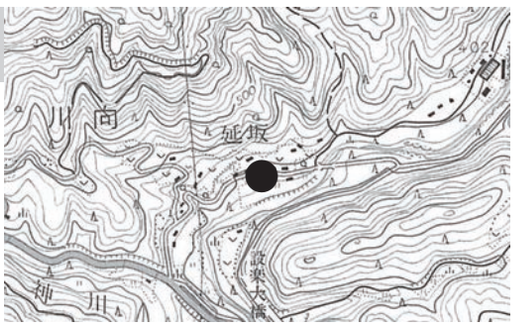
TT01東壁断面図と土層解説



1 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト混じり粘土(現代の耕作土)
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト混じり粘土 細粒砂含む(1の床土)
3 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土 細粒砂含む(1の床土)
4 2.5Y5/6 黄褐色細粒砂
5 10YR4/1 褐灰色粘土 細粒砂含む 下位はやや明るい色調(近世以降の耕作土)
6 2.5Y6/2 灰黄色粘土に10YR3/2 黒褐色がブロック状に混じる
7 5Y7/2 灰白色粘土と5Y4/1 灰色粘土がブロック状に混じる 下層部に7.5Y7/1 灰白色細粒砂がラミナ状に入る
8 7.5YR4/1 褐灰色粘土と2.5Y6/1 黄灰色粘質シルトがブロック状に混じる(中世以降の不明遺構 01SX)
9 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト 7.5YR4/1 褐灰色シルトがラミナ状に入る(古墳時代以降の不明遺構 02SK 1層)
10 10YR5/1 褐灰色粘土と7.5YR4/1 褐灰色粘土がブロック状に混じる(古墳時代以降の不明遺構 02SK 2層)
11 5G2/1 緑黒色粘土と10GY5/1 緑灰色シルトが混じる(古墳時代以降の不明遺構 02SK 3層)
12 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト(基盤層)

姫下遺跡の調査概要

上ヲロウ（かみをろう）・下ヲロウ（しもをろう）遺跡（本発掘調査B）



調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分48秒 東経137度33分59秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　令和2年6月～令和3年1月

調査面積　10,525㎡

担当者　鈴木正貴・川添和暁・田中　良・堀木真美子
河嶋優輝・鈴木恵介・宮腰健司・渡邉　峻

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和２年６月から令和３年1月にかけて実施した。調査面積は10,525㎡で、県道および沢を境に、20A区・20B区・20C区の三区に分けて調査を行った。

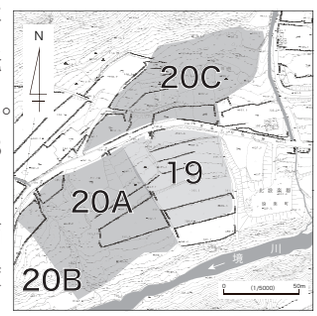


図１　調査区位置図

立地と環境　遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地する。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んで来ており、緩斜面は度重なる扇状地堆積（土石流堆積）の累積によって形成されている。標高は、20A区・20B区で380～400m、20C区で400～410mを測る。

調査の概要　基本層序は、斜面上方の20C区と下方の20A区・20B区とで詳細が異なるものの、概ね上から、第1層：表土および近代以降の盛土・耕作土、第２層：古代から近世の包含層および耕作土（灰褐色および黒褐色あるいは黒色シルトもしくは粘土層）、第３層：縄文時代中期～弥生時代中期の遺物包含層（黒色粘土層および褐色粘土層）、第４層：無遺物層（明黄褐色粘土および礫層・黒色の強い粘土層・灰白色の砂層）、である。第４層は縄文時代前期以前に形成された堆積層で、これより以下からは遺構・遺物を確認することができなかった。当遺跡では、この第４層が堆積そして安定化してはじめて、ヒトの安定的な活動が行われたものと考えられる。確認された、遺構・遺物は下表の通りである。　（川添和暁）

時代・時期	確認調査区	検出遺構	出土遺物	備考
縄文時代中期中葉	20A区	竪穴建物跡1	土器・石器	当地での集落形成の始まり。
縄文時代中期後半～後期前葉	20A区	竪穴建物跡・配石集石遺構・大型土坑（土坑墓主体か）、土器埋設遺構	土器・石鏃・礫器・剥片石核類・磨製石斧・石錘・磨石敲石類・石皿台石類	竪穴住居と埋葬遺構群、配石集石遺構による集落形成。
縄文時代後期前葉～中葉	20C区	竪穴建物跡２以上、大型土坑（貯蔵穴）、柱列	土器・石鏃・打製石斧・礫器・剥片石核類・磨製石斧・磨石敲石類・石皿台石類	竪穴建物と貯蔵穴群による集落形成。
縄文時代後期末～弥生時代前期	20A区 20C区	竪穴建物跡、土器棺墓を含む土器埋設遺構3以上、磨製石斧埋納土坑	土器・石鏃・打製石斧・礫器・剥片石核類・磨製石斧・石冠・岩偶岩版類・石棒石刀類	黒色土中での遺構・包含層形成（集落跡）。
弥生時代中期後葉	20A区	竪穴建物跡5、溝、自然流路	土器（甕・深鉢・壺）、石器（有茎鏃・紡錘車）、管玉、	土石流堆積による集落の保存。竪穴建物の周堤を確認。
古代および中世～近世以降	20A区 20B区 20C区	竪穴状遺構1、掘立柱建物跡2、ピット列、その他土坑、ピット、谷地形内での遺物堆積	陶器（須恵器・灰釉陶器・山茶碗・擂鉢・天目茶碗・その他近世陶器）、土師甕・鍋（伊勢型・内耳）、砥石、銅銭（祥符通宝・洪武通宝・永楽通宝）・鉄滓	20A区北端と20C区で活動痕跡明瞭。20A区北半は、縄文時代の土器を多量に含む古代以降の耕作土が広く展開する。

２０Ａ区

20A区では、遺構および包含層の上には、盛土、耕作土、そして土石流堆積層が広がっていた。調査区北端では、耕作土下から近世の柱穴列を検出した。柱穴列を構成するピットでは柱痕が明瞭に認められ、4基一列の単位で、計2列を確認した。近世の遺構が展開する範囲より南側では、三層の遺物包含層が確認された。一層目は、調査区中央から北側に広がる黒色土(検1のA層)で、縄文時代前期から晩期までの遺物が出土する。遺物は、細片化や摩滅が激しいため、より上位の山からの崩落土である可能性が高い。本層は撹拌気味で、古代以降の遺物も含むことから、後世の耕作土の可能性が高い。二層目は、調査区中央から南側に広がる黒色土(検1のB層)で、縄文時代後期から弥生時代中期までの遺物が出土するが、圧倒的に縄文時代後期から晩期の遺物が多い。上部は摩滅した土器片が多いことから、弥生時代中期後半の土地改変を受けたと考えられる。三層目は、B層下の南側を中心

遺物包含層

に広がる暗褐色から褐色を呈する包含層で、縄文時代中期・後期の遺構埋土でもある(検2)。縄文時代中期中葉の竪穴建物跡（1112SI）埋土にも同様の堆積があることから、調査区北側にも続いていて、土石流や後世の土地改変により大半は失われたと思われる。

南側では、土石流堆積層下から弥生時代中期後葉の集落跡が検出され、竪穴建物跡では、周堤が確認された。周堤は建物外周に土手状の高まりとして認められ、その下部は浅い溝状に凹む。遺存状態が良好な1055SIでは、周堤下部の凹みは確認できなかった。また、山側から境川側に向かって建物の外側を巡るように溝が掘られており、結果的にL字あるいはコの字に伸びている。溝は1110SD、1100SD、1075SDの順に更新されていた。集落は、縄文時代の遺物包含層を一部削平して構築されたため、出土遺物は弥生時代の遺物に加えて、縄文時代の遺物が目立つ。竪穴建物跡内よりも溝と周堤から多く遺物が出土した。

弥生時代中期後半

１０３３ＳＩ

1033SIは、西側にある竪穴建物跡で、周堤が1075SDに切られていることから、比較的古い時期に構築されたものと考えられる。時期が分かるような土器片は出土していないが、弥生土器片が周辺で数点確認できていることと、緑色の管玉が1点出土していること、竪穴建物跡の構造が他と共通することから、弥生時代中期後半と考えられる。

１０５５ＳＩ

1055SIは、土石流によって覆われて、特に周堤の遺存状態が良好であったことから、全国的にも貴重な調査事例となった。この竪穴建物跡は、3面以上にもわたり床面が更新され、それぞれの床面に地床炉が伴う。その最新床面からは、弥生時代中期後半の甕が5点出土している。これらの土器はいずれも外面に煤が付着していた。図５の3はほぼ完形の小形の台付甕である。図５の5は文様と底部の布目圧痕から、栗林式の影響をうけた南信地方の土器である可能性が高い。図５の１・２は、口縁部が逆さまの状態で埋められていた。また、これら土器の他にも石製紡錘車2点（図６の６・７）、円盤状の石器2点（図６の８・９）、磨製石斧2点などが出土した。土器の出土したやや西よりの範囲で、炭化物が集中している。周堤は、数段階に分けて構築されたと考えられ、周堤の下部と上部の中間で甕がまとまって出土し、焼土を含む土坑が検出された。さらに、この竪穴建物跡に先行する形でもう一回り大きな竪穴建物跡1285SIも検出された。

１０６５ＳＩ

1065SIは、1055SIの次に遺存状態が良好で、周堤は凸状の高まりが山側の一部に残存していた。これも1055SI同様2回以上床面を更新しており、それに伴う地床炉が検出された。遺物はあまり出土していない。周堤は土手状の高まりとして認められたが、その下部は浅い溝状に落ち込む。また、この竪穴建物跡の下層から、ほぼ重複する位置で、縄文時代中期後半と考えられる地床炉を伴う竪穴建物跡も検出された。

縄文時代後期・晩期

弥生時代中期後葉の集落跡の下には、縄文時代後期末～晩期（弥生前期含む）と、縄文時代中期後半～後期前葉の遺構群が展開する。縄文時代後期末～晩期では1329SKのような突帯文土器（五貫森式古段階）を棺身とする土器棺墓のほか、1114SJのような後期末の土器埋設遺構も認められる。これらはB層とした黒色土包含層中で形成されていた。

縄文時代後期前葉の遺構としては、竪穴建物跡と大型土坑、配石遺構、土器埋設遺構などが検出された。竪穴建物跡は、配石遺構の下層から検出されていることから、竪穴建物跡が廃絶したのち、黒色土の形成途中で配石遺構群が構築されていることがわかった。1549SIからは、土器が何重にも重なって埋められた土器埋納炉が検出されている。図3の北西では、大型土坑のまとまりが確認でき、これらは、浅く焼土もないが、焼けた石を含む配石の確認できる土坑もある。土器埋設遺構は、1209SKや1253SKのように立位のものが多いが、1300SZのように横位で検出されたものもある。

配石遺構は、調査区東側、特に1055SIの周堤付近は残りが良好だった。1065SIやその周辺でも礫が点在し、礫の集中部を検出できることから、本来は東側一帯に配石遺構群が展開していたのが、弥生時代の集落形成によって一部攪乱された可能性がある。礫は、片麻岩や花崗岩が主体で構成され、焼けた石はほとんどない。角礫から亜角礫を主体とするが、大きさは多種多様で、統一性は感じられない。また、石核・原石と考えられる安山岩や磨石などが少量含まれる。

縄文時代中期後半

縄文時代中期後半は、石囲炉を伴う竪穴建物跡3棟、地床炉を伴う竪穴建物跡3棟が検出された。竪穴建物跡は、いずれも壁柱穴列をもつことで共通している。1152SIの石囲炉は、側面だけでなく底面にも平たい石が敷かれ、炉の内側には大型の土器片が敷きつめられていた。また、底面では少量の焼土と、埋土を何回か掘り返した状態が確認された。このことから土器敷は石囲炉の機能終了段階で行われたものと考えられる。

縄文時代中期前半

1112SIは縄文時代中期中葉まで遡る竪穴建物跡である。構造は、中央に地床炉をもち、壁柱穴列が巡る。中期中葉の北屋敷式の土器片や剥片、台石などが出土している。

A区まとめ

今年度の調査では、設楽ダム関連の発掘調査で初めて弥生時代の集落跡が検出された。特に、周堤の残る竪穴建物跡と、そこから出土した土器群と紡錘車や磨製石斧などの石器の組み合わせは、その時期を表す一括資料として貴重な事例となった。また、竪穴建物跡と溝など集落の構造も把握できる調査となった。

昨年度検出された縄文時代晩期の遺構は、今年度では突帯文土器の埋設遺構以外は把握できなかったが、その遺構埋土でもある黒色土(検1B層)からは遺物が出土したため、A区にも活動の痕跡があることを確認することができた。後期は、竪穴建物跡と土器埋納炉の居住としての利用と、大型土坑や配石遺構群、土器埋設遺構などの祭祀の場が時期差もなく近接した形で営われることを確認出来た。

20B区

20B区では、土石流と後世の削平を受けた堆積層の下から、砂層の堆積による緩斜面が調査区中央で検出され、そこから大きな落ち込みが1基と数点の遺物が検出された。この砂層は、20A区に伸びているものと考えられ、20A区の方が少し低くなっている。20A区西端に検出された1001NRは、この調査区では検出できていない。北端には近代の石垣があり、その裏込めの下には近世以降の造成土が検出された。この北端付近には、元文元年に書かれた「川向村絵図」に社の記載があるため、ここより西にその社があったと思われる。以上、20B区では、縄文時代と考えられる人々の活動の痕跡をわずかだが確認することができ、近世以降は北端に造成による平坦面を作り出していることがわかった。（田中　良）



弥生時代中期後葉の集落跡(上が北)



1065S完掘状況I(南から)

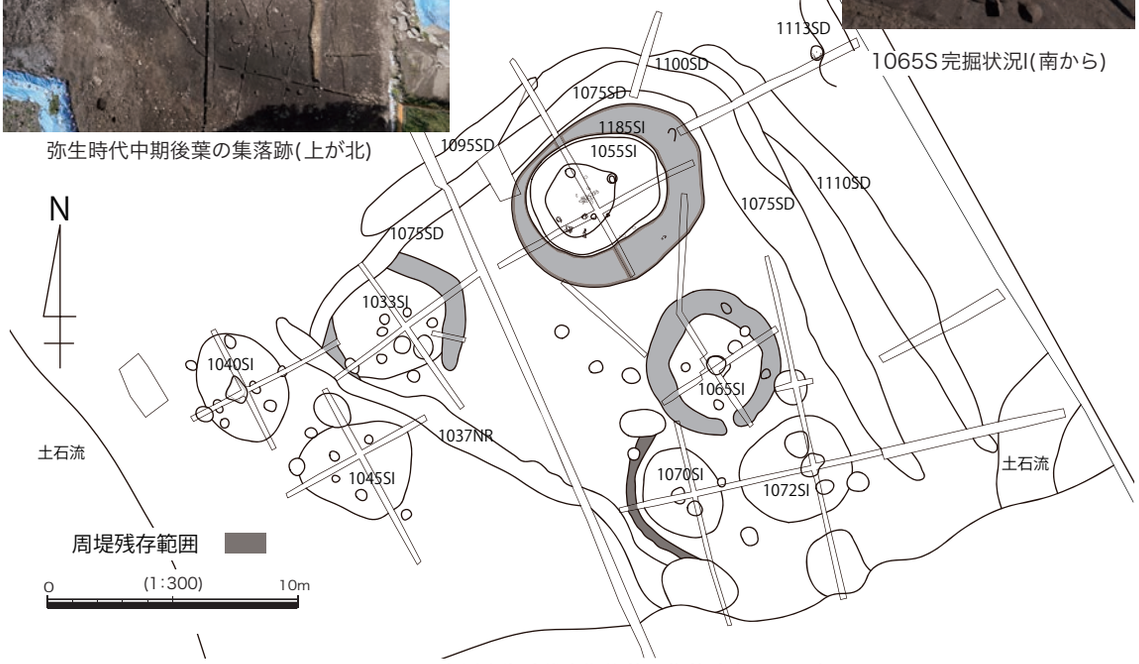


図2　20A区南側弥生時代中期後葉の集落跡(S=1/300)



1449SI完掘状況(南から)
縄文時代後期



縄文時代遺構検出状況(東から)



1152SI機能面検出状況(南から)
縄文時代中期後半

図3　20A区南側縄文時代の遺構位置図(S=1/300)

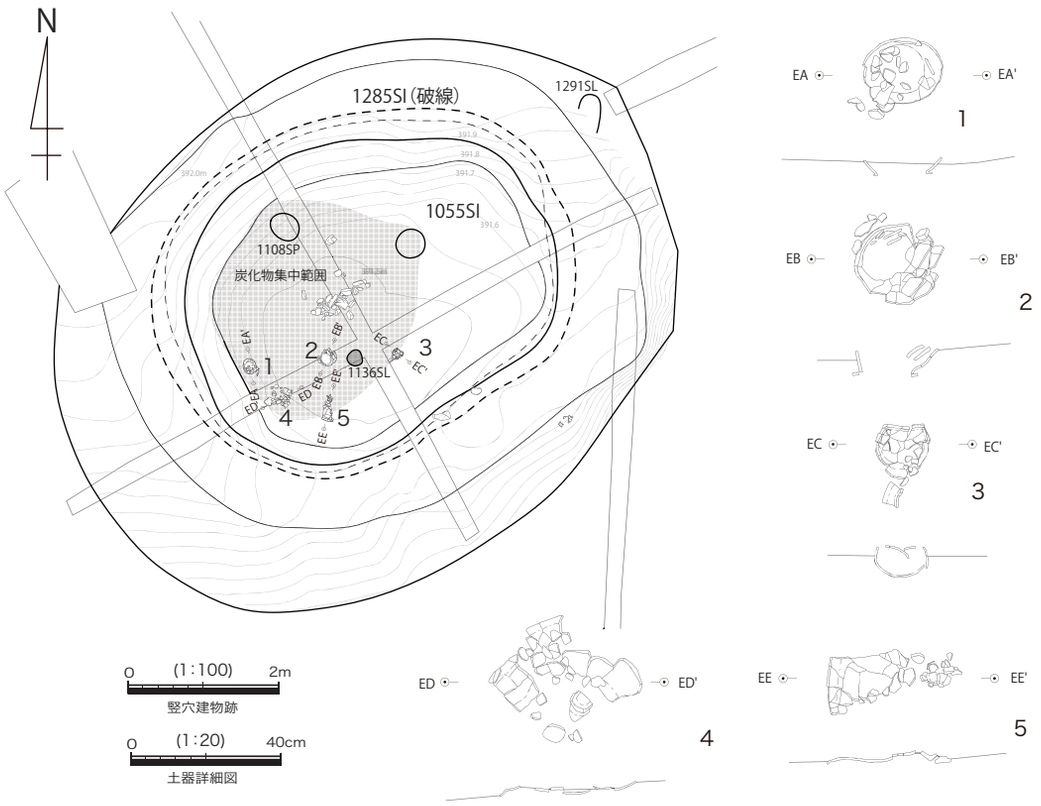


図４　1055SI遺構平面図（S=1/100）

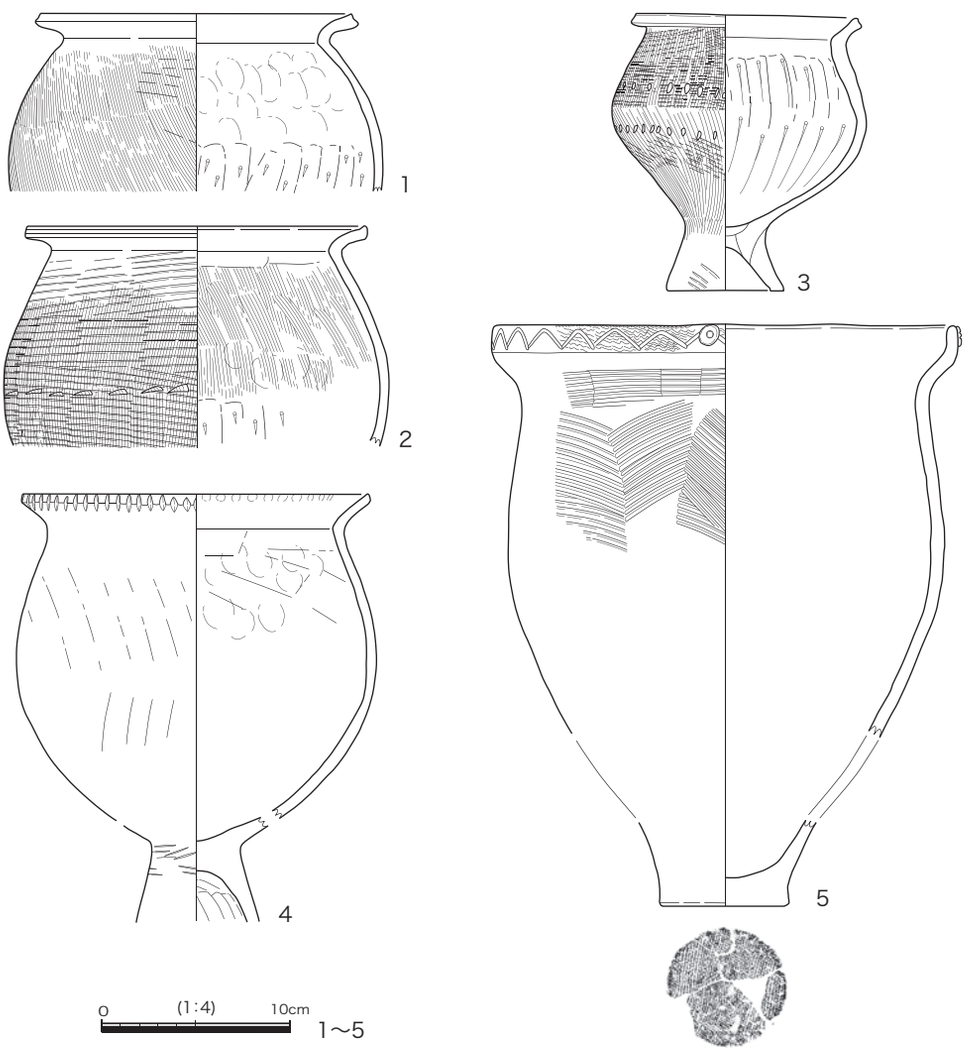


図５　1055SI出土遺物１



1055SI機能面検出状況(南から)



1055SI土器出土状況(南西から)

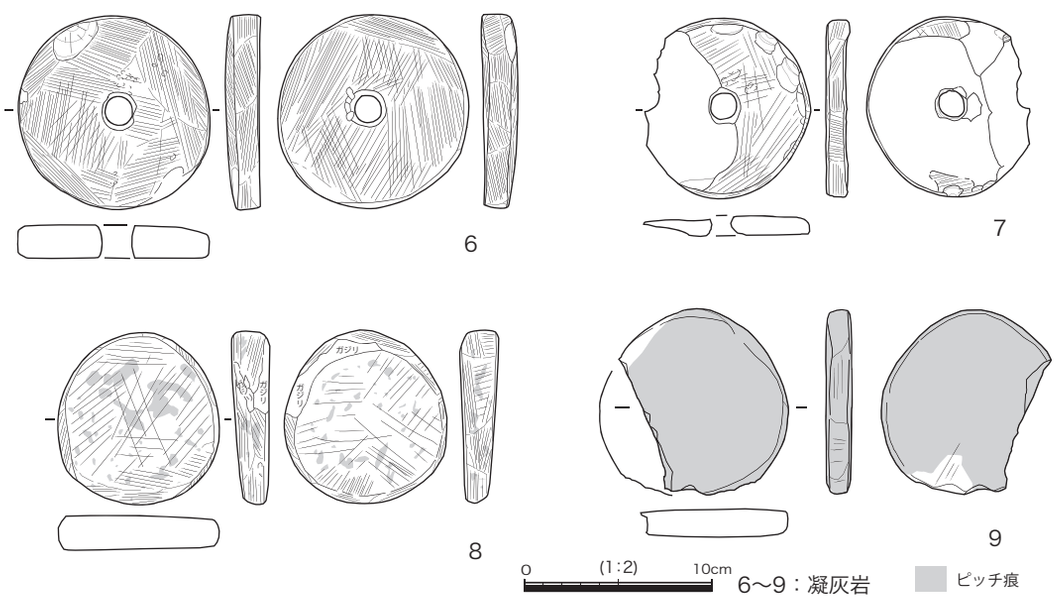


図6　1055SI出土遺物2



2093SI(南から)

図7　20C区古代以降遺構位置図

２０Ｃ区

20C区は、県道北側に設定された調査区である。調査区外北側の斜面上方から、湧水による作用もあり、中央部分は浅い谷地形の景観を呈する。遺構・遺物の保存が良好であったのは、調査区北東側と西端の範囲であった。特に、調査区東側の区域では、古代以降の遺構・遺物と縄文時代の遺構・遺物とが層位的関係をもって確認された。（川添和暁）

古代以降竪穴建物跡

2093SI・2597SI・2603SIは、20C区北東で重複して検出された竪穴建物跡である。上層から、対辺間約4.7mの隅丸方形の2093SI、長軸約3.7m、短軸約2.9mの楕円形の2597SI、長軸5.8m以上の楕円形の2603SIが重なる。明確な主柱穴は確認できず、遺構外縁部に並ぶ土坑が壁柱列を構成したものと推定される。現地は南向する斜面部にあたり、また東側には土石流の流路となる谷地形が迫っているため、2093SI、2603SIの南～東側は削平により掘方の外形が復元できない。また、谷地形の肩のラインに沿うように幅40～70cmの溝状遺構2094SDが検出された。土層断面の観察の結果、2597SIの利用開始と同時か、存続期間中に掘り込まれている。2597SI床面からの深さは60cm程度で、用途は不明であるが、何らかの水利施設である可能性が考えられる。

埋土の上層には近世陶器が少数含まれ、床面付近では灰釉陶器が複数点出土し、下層に広がる縄文時代包含層に由来すると思われる土器も少数出土した。本遺構は灰釉陶器の時期の建物跡と推定され、いずれにも9世紀代後半～10世紀代前半の年代が与えられる。

土坑列

6基の小土坑が連なる2903SAでは、東から二番目の2073SKで銅銭が複数点出土した。銅銭には祥符元宝、洪武通宝、永楽通宝が含まれ、中世末期～近世初頭の遺構と思われる。明瞭な柱痕跡は見られないが、後述の柱穴列と同様に土留めの柵であったと想定される。

柱穴列

2901SA、2902SAは、どちらも柱穴5基が直線上に並ぶ遺構である。両者は南北に並び、掘り方、柱痕跡の規模も類似するが、軸方向が異なるため建物を構成したものではない。南側の2902SAで確認された柱痕跡の直径は最大で35cm程度である。付近から近世陶器や内耳鍋が出土することから、近世の遺構と考えられる。山からの斜面の中に作られた細長い平坦面上であり、土留めの柵などが設けられた跡と考えられる。

２０Ｃ区西端部の遺構群

20C区西端部には、基盤層まで削り込んだ平坦面が造成されており、土坑のほか、柱穴列2904SA、2905SA、2906SA、2907SA、掘立柱建物2908SB、2909SBが検出された。2908SBでは、建物を構成する柱穴のうち３基で板石が出土しており、柱の支えとして設置されたものと考えられる。2904SA、2905SA、2909SBは軸方向が一致し、平行して並ぶ2906SA、2907SAは建て替えによるものと見られる。切り合い関係を含め整理すると、西端部の遺構は2908SBとそれ以外の2時期に分けられ、前者は後者の廃絶後に建設されている。内耳鍋、擂鉢等が出土することから、近世の遺構群と推定される。（河嶋優輝）

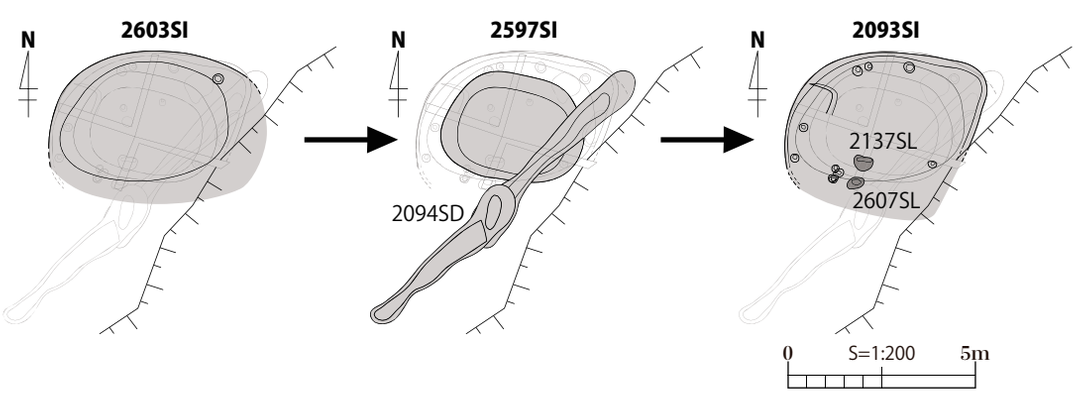


図８　20C区古代竪穴建物跡の変遷

２０Ｃ区縄文時代

調査区北東側では、古代以降の包含層下に、先史時代の包含層を上下２層で確認した。上層は黒褐色粘土層で縄文時代晩期～弥生時代の遺物も包含する層である（C層）。掘削中に橿原文様を有する石棒石刀類も出土した。その下には、やや赤みを帯びた黒色粘土層が広がっており、縄文時代中期後半から後期中葉・八王子式までの遺物を包含していた（D層）。

貯蔵穴群

C層およびD層を掘削したところ、縄文時代後期前葉（福田K2式併行）を主体する、集落跡を検出した。集落は竪穴建物跡と貯蔵穴と思われる土坑群、さらには柱穴列によって構成されていた。これらの集落は、南西方向に向かって傾斜する斜面の鞍部で展開していた。

竪穴建物跡

竪穴建物跡2703SIは、隅丸方形を呈するプランで、中央に地床炉をもつもので、柱構成は壁柱であったと考えられる。この建物跡に先行する同様の落ち込みが最低２箇所確認することができており、これらも同じ場所に繰り返しつくられた竪穴建物跡の可能性が高い。隣接する位置で見つかった、2740SIは上層に大型の角礫が大量に廃棄されていたもので、掘り方底面で炉跡を検出した。炉跡の場所は、埋土掘削過程で、側面立ちする焼けた板石が存在していたことから、石囲炉跡であった可能性が高い。柱構造は不明であるか、主柱穴構造であった可能性が高い。その柱穴の候補と考えられる一土坑からは、後期前葉の土器がまとまって出土した。

（川添和暁）

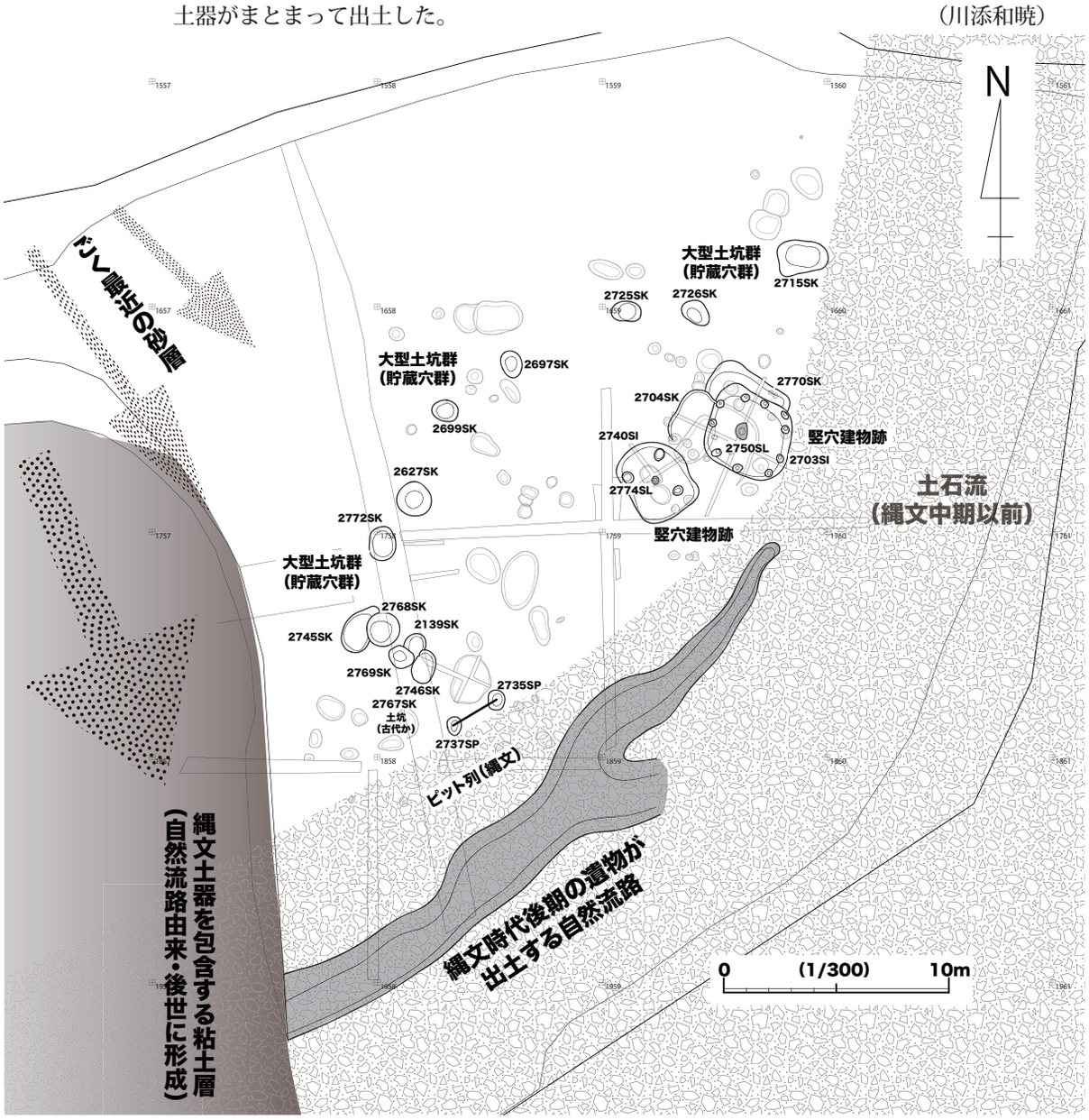


図９　20C区縄文時代遺構位置図（S=1/300）

しものべざか 下延坂遺跡（本発掘調査B）

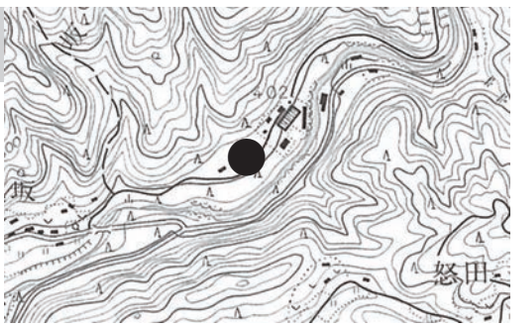
所在地　北設楽郡設楽町川向字上延坂・下延坂
（北緯35度06分58秒　東経137度34分28秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　令和2年6月～令和2年11月

調査面積　3,130㎡

担当者　鈴木正貴・堀木 真美子・蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和2年6月から同年11月にかけて実施した。調査面積は3,130㎡で、北東から南西に細長い調査範囲のうち、北東側を20A区、南西側を20B区として調査を行った。

立地と環境　下延坂遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する遺跡で、本年度の調査区は町道79号川向境川線の山側に当たり、調査前の遺跡部分は宅地や畑が棚状の段になっており、一部に植林がされていた。

調査の概要　基本層序は、上から表土及び近代以後の整地・盛土、中世以後の土石流の堆積、縄文時代晩期～弥生時代の遺物を包含する黒色粘土質シルト層、縄文時代の土石流の堆積、地山の黄褐色粘土・岩盤となる。遺構と出土遺物は、20A区北端部と中央部から南側部分、20B区の北西側の緩やかな斜面において確認できた。確認できた遺構と出土遺物には、縄文時代晩期～弥生時代前期（約3,000～2,500年前）、弥生時代中期後葉（約2,000年前）、鎌倉時代～室町時代（約700～500年前）の大きく３時期のものがあった。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構には、竪穴状遺構9基、平面円形から楕円形の土坑123基を確認した。竪穴状遺構は、長軸３ｍ前後、短軸２ｍ前後の平面隅丸台形から楕円形をしており、遺構の縁がやや溝状に深くなっていた。炉の痕跡と思われる焼土面や石積み、柱穴跡は確認できなかったが、大型の平石が床面上で見つかるものがあった。出土遺物には縄文土器（条痕文土器）、打製石斧、石匙、剝片などがある。

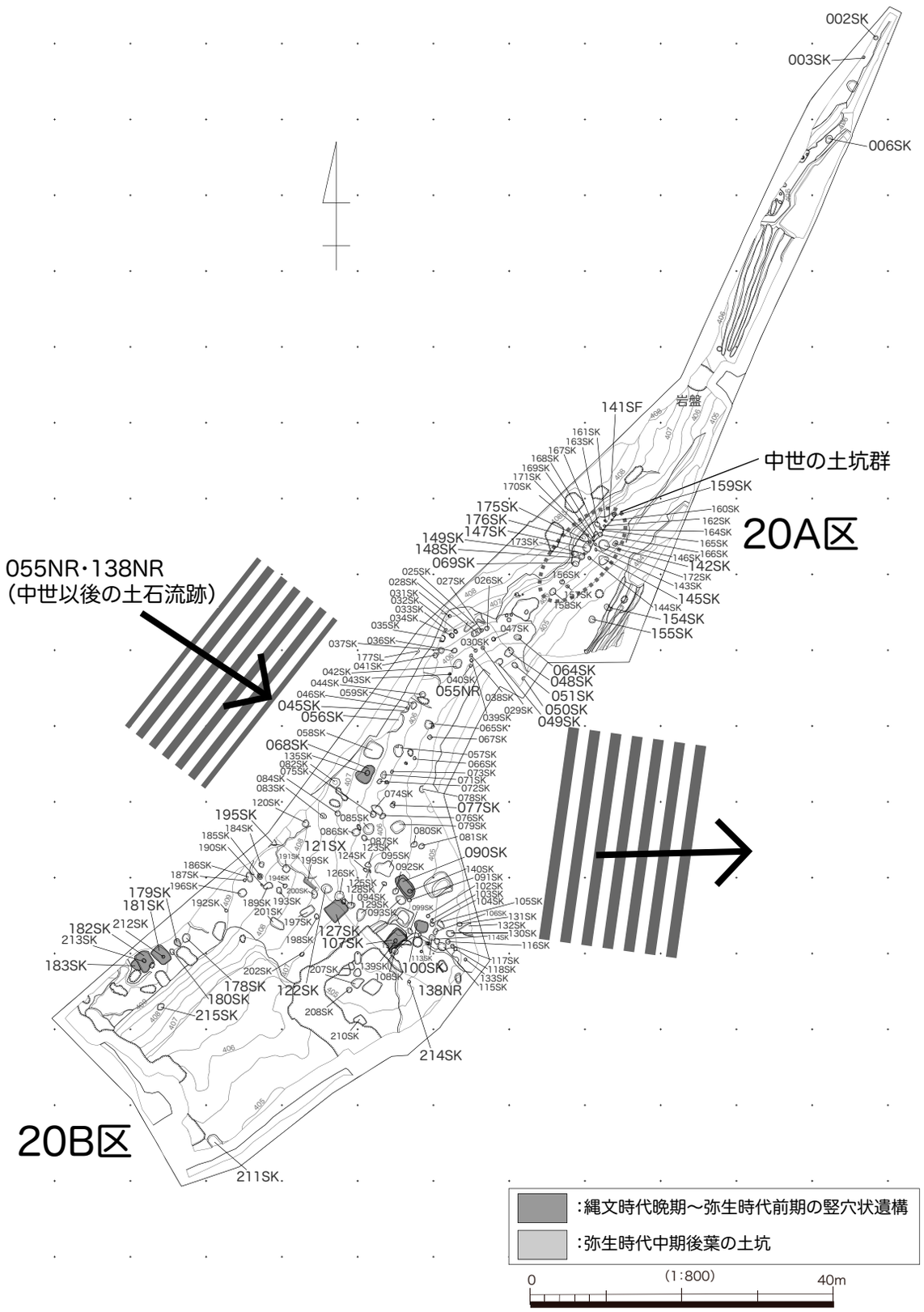
弥生時代中期後葉の遺構は、20B区西側の179SKがある。この土坑の中からは、弥生土器の櫛条痕調整深鉢が出土した。

鎌倉時代～室町時代の遺構は、20A区中央部に土坑29基を確認した。これらの土坑は山の斜面を棚状に削り出した平坦面に2～3列の列状に並んでいた。その平面形は円形から楕円形で、大きさは径20～140cmまで大小のものがあり、土師器の伊勢型鍋や羽付鍋、鉄製品が出土する土坑もあった。



遺跡全景（上から）

ま と め　今回の調査で確認された遺構と遺物は集落跡の一部分とはいえ、設楽地域の歴史を考える上で貴重な成果となった。　（蔭山誠一）


002SK
003SK
006SK
141SF
岩盤
中世の土坑群
159SK
20A区
055NR・138NR
（中世以後の土石流跡）
055NR
064SK
048SK
051SK
050SK
049SK
045SK
056SK
068SK
077SK
121SX
090SK
179SK
181SK
182SK
212SK
213SK
183SK
127SK
107SK
100SK
138NR
122SK
178SK
180SK
215SK
214SK
211SK
20B区
:縄文時代晩期～弥生時代前期の竪穴状遺構
:弥生時代中期後葉の土坑
0
(1:800)
40m

遺構平面図（S=1/800）



20A区北端部（北東より）



20A区002SK断面及び遺物出土状況（東より）



20A区006SK条痕文土器出土状況（北より）



20A区中央部にある中世の土坑群（南西より）



20A区159SK羽付鍋出土状況（南西より）



20A区145SK鉄製品出土状況（南より）



20A区121SX石匙出土状況（東より）



20A区122SK打製石斧出土（北東より）



20A区077SK断面・剝片出土状況（東より）



20A区南西隅部（南西より）



20A区107SK作業風景（北より）



20A区107SK（北より）



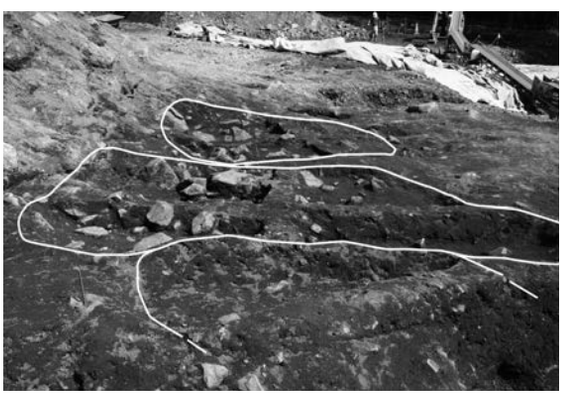
20A区090SK（北より）



20B区全景（南より）



20B区179SK弥生土器出土状況（北東より）



20B区180SK～182SK（南西より）

胡桃窪遺跡（本発掘調査B）

所 在 地 北設楽郡設楽町大名倉字胡桃窪・丸山
（北緯35度06分13秒　東経137度33分10秒）

調 査 理 由 設楽ダム

調 査 期 間 令和2年5月～令和2年10月

調 査 面 積 2,825㎡

担 当 者 鈴木正貴・鈴木恵介・渡邉　峻



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は国土交通省設楽ダム工事事務所による設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局の委託を受けて令和２年5月から令和２年10月にかけて実施した。調査対象地の現況は造成された旧耕作地である。近代の耕作土および床土を表土掘削により除去した後に検出を行い、縄文時代の竪穴建物跡、平安時代の竪穴状遺構等の遺構を検出した。調査面積は2,825㎡である。

立地と環境　胡桃窪遺跡は寒狭川（豊川）左岸河岸段丘上の南西方向に下る斜面から下位の河川敷部分にかけて立地する。寒狭川は鷹ノ巣山（段戸山）に発し、大名倉周辺ではおおよそ南東方向に流れるが、胡桃窪遺跡付近より大きく蛇行し、下流約1kmで境川と合流する。同じ寒狭川下流側には大名倉丸山遺跡、上流側にはハラビ平遺跡が確認されている。

調査区が立地する南西向きの斜面は幅約150mで、北西側は寒狭川による段丘崖となり、南東側は沢によって削られた崖となっている。遺跡周辺の南向きの斜面では、胡桃窪遺跡付近は比較的傾斜が緩く、まとまった面積が確保できるため水田や畑地、河川敷部分では製材所が営まれていた。

本調査に先立つ平成27年度に範囲確認調査が実施されており、この結果に基づいて県道瀬戸設楽線を挟んだ斜面部分が調査区として設定された。調査の都合上、県道南側をA区。北側をB区とした。地表面の標高は、最も低いA区側で415m、最も高いB区最上位部分では431mである。

調査の概要　調査は県道瀬戸設楽線の南側に設定されたA区より着手した。A区の調査前の現況は造成された水田であり、旧地形は北東から南西に下る斜面である。現代の水田の造成にあたっては、斜面上位側を削平し、その土砂を斜面下位側に盛る方法で平坦面を構築している。B区も含めた胡桃窪遺跡内の全体で同様の方法が採られている。そのため、旧地形の斜面上位側では削平によって遺構が滅失し、斜面下位側は盛り土によって遺構が残存する。ただし残存する遺構についても、植生等の影響によって表土が流出、撹乱されているため残り方は良好ではない。A区では小型の土坑状遺構を多く検出し、B区ではこれに加えて縄文時代前期後半・中期後半の竪穴建物跡それぞれ１基を、平安時代中期の竪穴状遺構２基を検出した。

A区の遺構　A区内では、水田造成のため削平を受けた面積の調査区に占める割合が大きく、盛り土を除去した検出面は地山を切り出した面となり、検出された土坑状のものでも植生痕などが多く見られた。柱痕跡状の断面を持つ土坑は、003・043SKの２基が確認されたが、建物等に関わるとは考え難く、耕作に関わる稲木などを想定すべきと考える。時期は近世以降。範囲確認調査では灰釉陶器の破片も検出されていたが、これらは近世段階の耕作土

に混入していたものと見られる。

B区の遺構　B区の現況は、下部の大きく造成された水田3段、最上位の畑地１段よりなる。遺構が多く検出されたのは、上から２段目、３段目である。２段目では縄文時代前期後半の竪穴建物跡111SI、平安時代中期の竪穴状遺構100SIが検出された。３段目では縄文時代中期後半の300SI・399SI、平安時代の竪穴状遺構302SIが検出された。

竪穴建物跡１１１SI　竪穴建物跡111SIは、長軸3.61m、短軸3.06m、検出面からの深さ0.51mを測る。平面形状は楕円形に近い。斜面下位側が斜めに削平された状況のため、斜面上位（北東）側では掘方が深く残り斜面下位側は掘方がほぼ無い状況である。床面はほぼ水平だが北角部がわずかに高い。壁面は長軸方向である北西・南東側は緩やかに立ち上がり、短軸方向の北東側壁面は急に立ち上がっている。炉跡は161SLが検出されたが、炭化物を含む程度で明確な被熱は見られない。竪穴建物跡埋土より晴ケ峯式土器（長野県）に類似する土器が出土し、これにより111SIの年代を縄文時代前期後半とした。

土坑162SK　111SI内の土坑162SKは、黒曜石・溶凝灰岩の剥片を複数検出した。111SIでは竪穴建物跡内の埋土には黒曜石の破片はわずかしか含まれていなかったが、162SKの埋土には黒曜石・溶結凝灰岩の剥片を多く包含していた。

竪穴状遺構１００SI　竪穴状遺構100SIは、長軸3.91m、短軸2.87m、検出面からの深さ0.41mを測る。平面形状は方形だが、斜面下位の南西側は欠損している。柱穴は小口径の172・173・184SPが東側に並び、175・176SPが西側に並ぶ。これらとは別に156SKは平面形状方形で深さ0.8mを測る。156SKは竪穴内中央わずか西に位置する。この規模から156SKは竪穴中央の柱として想定でき、これを南北方向の中央とした場合、谷側で欠損した100SIは南北５.0m、東西3.9mに復元できる。遺物は灰釉陶器の碗と皿が出土した。時期はO-53窯式期に当る。

１００SI内の遺構　100SI内の遺構として、炉跡150SL、焼土集積151・152SU、土坑153・154・159・168SK等がある。100SIの埋土から鉄片・炭化物も多く検出されたことから、炉跡や焼土塊は金属加工に伴う作業を行なっていたと考えられる。153・154SKは100SI北側壁面内に抉るように掘り込まれており、この形状はこれらの土坑の用途等によるものと思われるが、現時点では明確な理由は不明であり、今後の検討が必要である。

３００SI　竪穴建物跡300SIは、残存状態で長軸4.37m、短軸1.48m、検出面からの深さ0.3mを測る。遺構の残存状態は概して悪く、北半部のみが残存した状況。柱穴は竪穴縁辺部分に巡り、竪穴内部には柱穴が検出されていない。縁辺部の柱穴は、西から338・340・339・350・352・353・354・361SPである。338SPを北限、361SPを南限とした場合は、北北西ー南南東に長軸4.7mを測り、東限を352SPとして石囲い炉300SLで反転した場合、東北東ー西南西の短軸4.1mの建物跡に復元できる。残存する柱穴間は0.6m～1.1m。石囲炉3001SLも北側３点の石は残存するも南側が欠損する。石囲炉3001SLの南側欠損部分は、抜き取り穴の痕跡から2～３点の石が欠損しており、本来の形状は多角形であったと考えられる。

３９９SI　竪穴建物跡399SIは、300SIに先行して造成されていたと考えられる。300SIを掘削した結果、底面で炉跡と柱穴列が検出されたため別の竪穴建物跡と判断したものである。300SIは柱穴列が壁面に位置し、炉跡3001SLの側石が残存するのに対して、399SIの柱穴列は壁面がすでに無く300SIの底面で検出されたこと、炉跡3002SLの側石が全て抜けていることから、これらは300SIの掘削に伴い削平されたと考え、399SIが300SIに先行する遺構と結論づけた。残存状態の規模は長軸4.86m、短軸1.72m、検出面からの深さ

0.2mを測る。柱穴は、西から347・330・348・342・345・349・364・363SPがある。炉跡3002SLは、確実なものとしては底面の被熱部分のみが検出されている。300SIの埋土掘削中に3002SLの上部で礫３点が確認されたが、原位置に据わるものではないと判断した。柱穴の347・363SPが長軸方向の両端に位置すると仮定した場合、長軸方向の長さ4.86m、3002SLと北側の349SPを短軸の北半部と捉えて反転復元すると、短軸方向の長さ2.22mとなり、北西ー南東方向に長軸を持つ竪穴建物跡と推定される。

３２６ＳＫ　300SI（399SI）東半部で検出された土坑。平面上の切り合いでは300・399SIに後続して掘削され、竪穴建物跡とは併存しない。長軸0.97m、短軸0.95m、検出面からの深さ0.49mを測り、側壁はややオーバーハングする。検出された遺物には縄文土器や石器が見られるものの、これらは326SKが埋没する際に300SI・399SIの埋土が混入したものと考えられる。縄文時代以降の遺物は検出されておらず、300SI廃絶以降、それほど遠くない時期に掘削されたと考えられる。

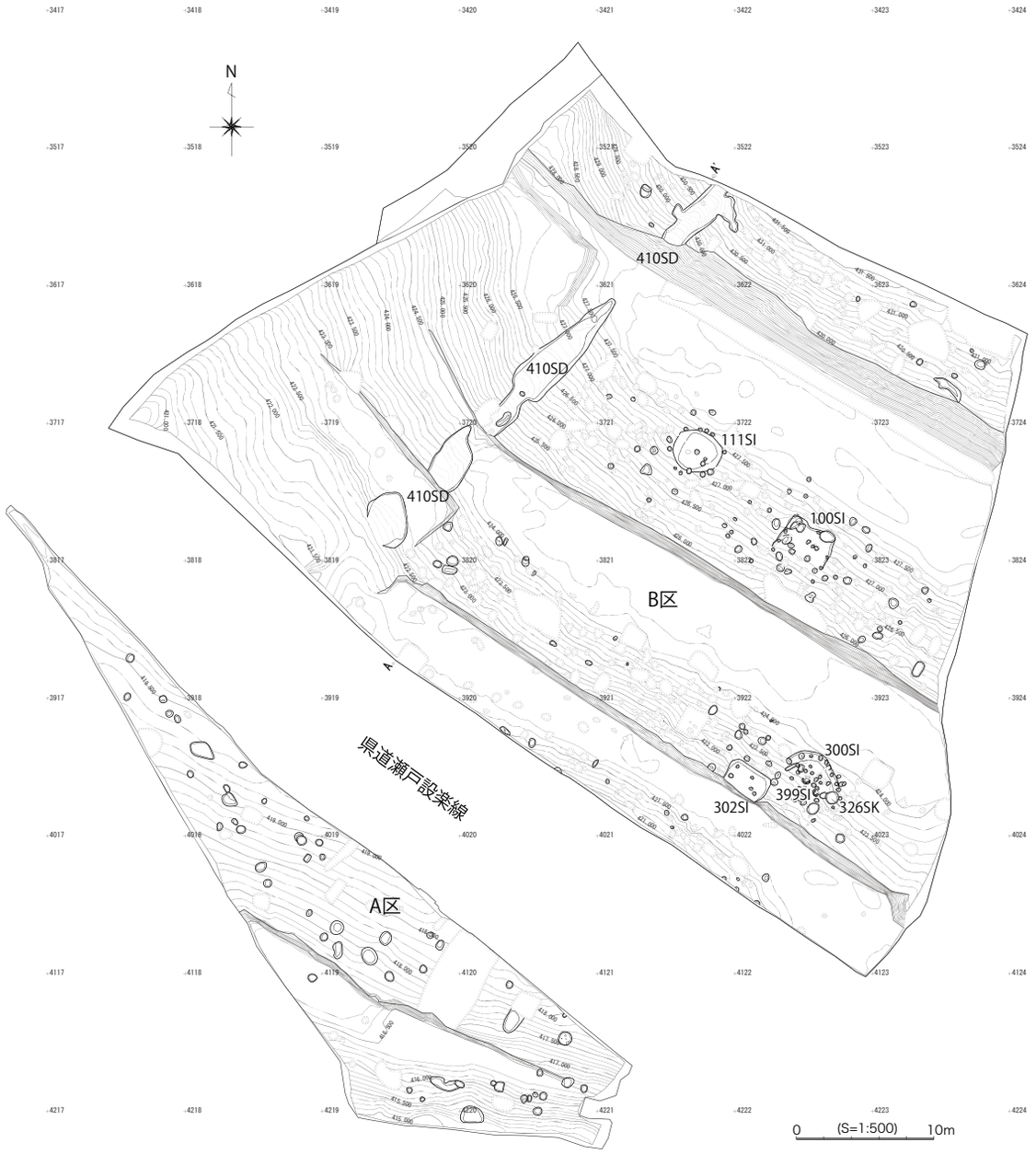
３０２ＳＩ　竪穴状遺構302SIは、長軸3.31m、短軸2.0m、検出面からの深さ0.45mを測る。遺構内埋土からの直接の遺物出土は無く、遺構の時期は、埋土が基本層序中で灰釉陶器を包含する層に類似することから平安期と判断した。柱穴は西から321・320・319・318・317SPが検出された。南側が現代の水田造成に伴って大きく欠損しており全体の規模は不明。

４１０ＳＤ　410SDは、B区西半部で最上段の１段目から４段目まで検出された溝状の遺構である。現代の水田造成によって途切れた状態での検出となったが、標高と平面位置の状態から連続する遺構と判断した。層位は、上層から掘り込まれたことが明らかであり近現代の溝と考えられる。10月に開催した地元説明会では、昔の水田脇に410SDが流れていたという近隣にお住まいだった方のお話もあり、以前の水田や畑に水を供給した沢であった可能性が高く、遺構の時期は近現代であろう。

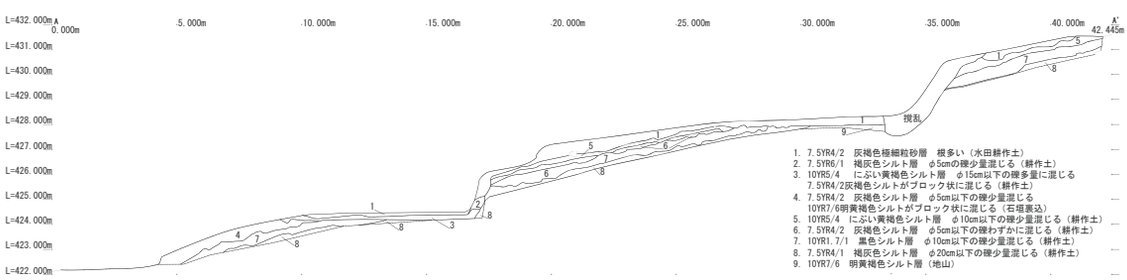
ま と め　胡桃窪遺跡の調査において主な遺構は、縄文時代は、前期後半の竪穴建物跡111SI、中期後半の竪穴建物跡300SI・399SIが、平安時代は中期の竪穴状遺構100SI、平安時代と考えられる302SIの合計5棟が検出された。これらはいずれも県道瀬戸設楽線の北側に設定されたB区で検出された。これは、元来が崩落、流出しやすい地質、地形であったことと、近現代の水田整備による切り土によって遺構面が滅失したことが原因で、限定的な検出状況となったと考えられる。その一方で、検出された遺構には、縄文時代前期後半の竪穴建物跡111SIや、平安時代中頃の竪穴状遺構100SIは設楽ダム関連遺跡調査の中で初検出（調査時点）された時期の遺構であり、これらは希少な遺構と考えることができる。

縄文時代前期後半や中期後半の竪穴建物跡に接近して、年代の大きく離れた平安時代の竪穴状遺構が検出されたことは、遺構が検出された調査区周辺の中では崩落等の影響が少なく、遺構検出面が辛うじて残存したことを示す。崩落の少ない場所を認識した上で竪穴建物跡や竪穴状遺構を構築する際に選地した可能性は高く、やや傾斜が強い調査区内でもB区周辺に遺構が集まって検出された原因の一つであろう。

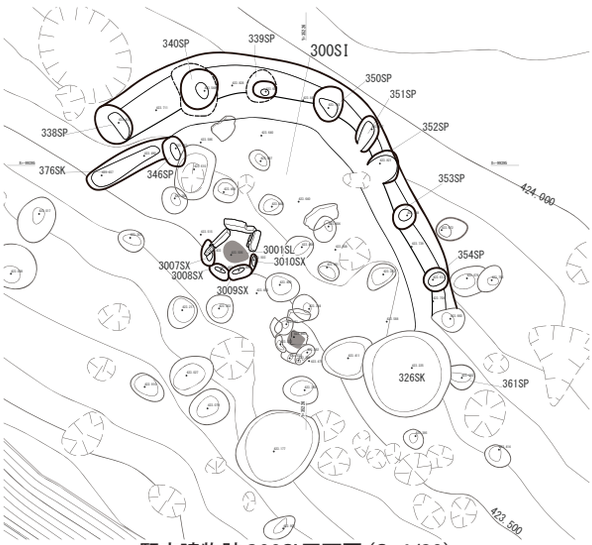
平安時代の竪穴状遺構100SIは焼土や炉跡、金属片を伴うことから、鍛治作業を行なったと想定したが、鍛治滓などの出土は現時点で確認できていない。平安時代の竪穴状遺構で炉跡や焼土等を伴う事例は、豊田市栗狭間遺跡や奈良市尾山代遺跡にあり、これらは木材加工に関わる遺構とされている。そのため、当遺跡の竪穴状遺構100SIについても同様の目的が想定される。（鈴木恵介）



調査区平面図 (S=1/500)



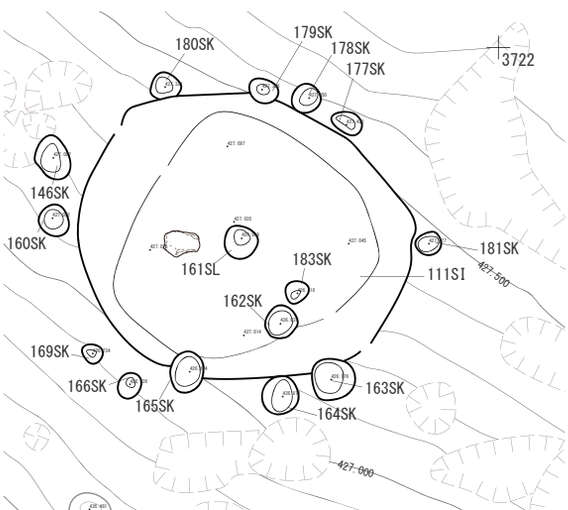
B区断面図 (S=1/300)



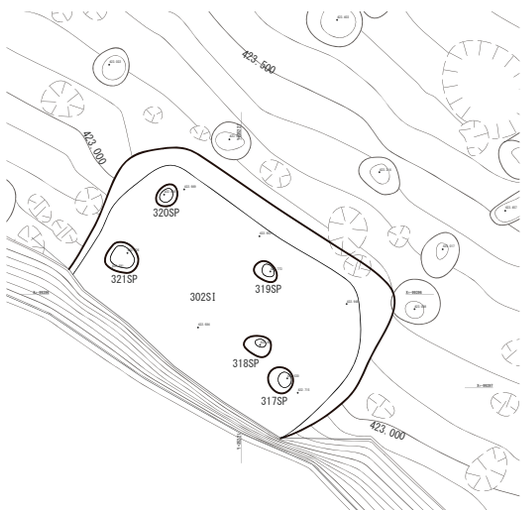
竪穴建物跡 300SI 平面図 (S=1/80)



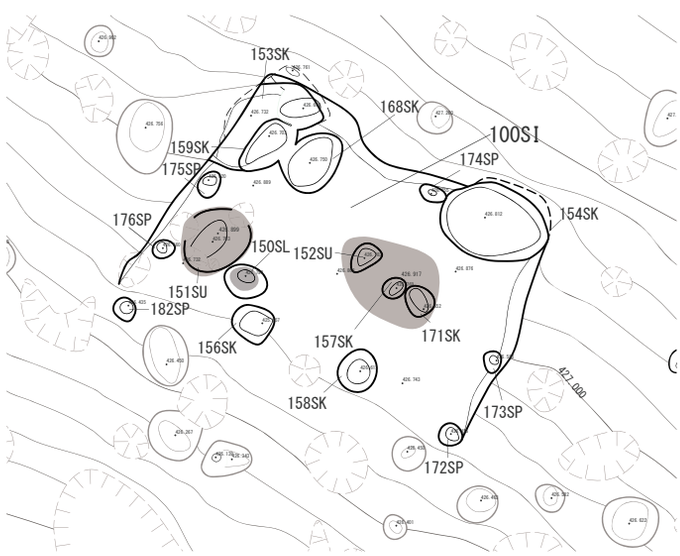
竪穴建物跡 399SI 平面図 (S=1/80)



竪穴建物跡 111SI 平面図 (S=1/80)



竪穴状遺構 302SI 平面図 (S=1/80)



竪穴状遺構 100SI 平面図 (S=1/80)



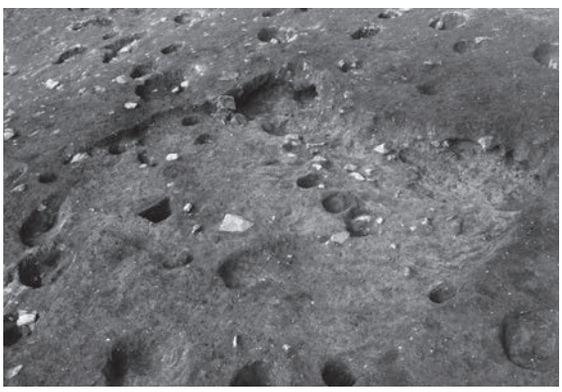
竪穴建物跡 111SI（南から・縄文時代前期後半）



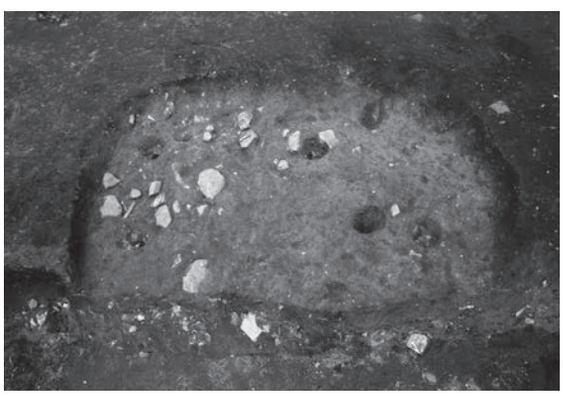
竪穴建物跡111SI出土土器（南西から・縄文時代前期後半）



竪穴建物跡 300SI・399SI（西から）



竪穴状遺構 100SI（南から）



竪穴状遺構 302SI（南西から）



B区全景（西から）



遺跡遠景（南西から）



遺跡全景（西から）

添沢（そえざわ）遺跡（本発掘調査A・B）

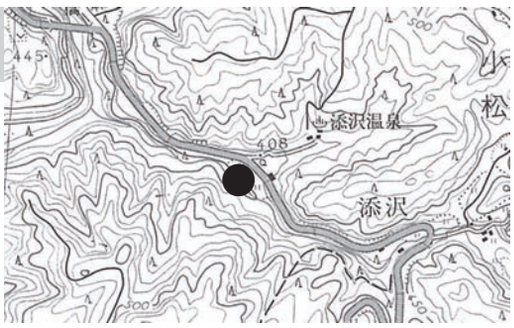
所 在 地 北設楽郡設楽町田口字添沢
（北緯35度06分22秒　東経137度34分23秒）

調 査 理 由 設楽ダム

調 査 期 間 令和2年6月～令和2年11月

調 査 面 積 1,769㎡

担 当 者 鈴木正貴・河嶋優輝・宮腰健司



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和２年６月から10月に実施した。調査面積は本発掘調査Aが14㎡、本発掘調査Bが1,755㎡である。平成27年度に実施した範囲確認調査では、明確な遺構は検出されなかったものの、山茶碗および須恵器が出土している。今年度の本発掘調査Ａの調査対象範囲は平成27年度の調査範囲の東側および北側の２箇所に分割されているため、それぞれ1箇所のトレンチを設定した。設定したトレンチはどちらも、国道257号と高さを揃えて造成された盛土から小松川方向へと下る斜面部にあたる。また、本発掘調査Bの調査対象範囲は添沢川を挟んで南北に分割されており、北を20A区、南を20B区とし、更に作業工程上、20A区を20Aa区、Ab区、Ac区に3分割して調査を実施した。

立地と環境　遺跡は設楽町田口地区、国道257号の南西側に所在し、添沢温泉の所在した北西の谷から南西へ流れる添沢川と、南東から北西へ流れる小松川が合流する地点の南北に展開する河岸段丘上に位置する。現地は西に向かって尾根状に突出した地点に当たり、この尾根状地形全体が棚田として造成されている。現地表面の標高は、20A区付近では403.5m～407.9m、20B区付近では400.2m～405.2mである。

調査の概要　調査区全体に人為的な地形の改変が及んでおり、一部では岩盤や基盤層まで掘り込んで水田のための平坦面を造成している。そのため、調査範囲の大部分で明瞭な包含層が確認できなかった。検出された遺構は用途不明の土坑がほとんどであり、竪穴建物、掘立柱建物、井戸等の存在は想定できない。

遺物は縄文時代早期に遡る土器から山茶碗等の中世遺物までが出土しており、近世以後の遺物はほぼ見られない。遺物の出土状況としては自然の谷地形の埋土中であるか、遺構内ではなく検出面（基盤層直上）からの出土がほとんどであり、二次堆積によるものと考えられるものが多い。

本発掘調査Aの結果　本発掘調査Aは20Ab区の北にTT01、20B区の南東にTT02を設定して実施した。基本的な層序は、地表面下ににぶい黄褐色～暗褐色の中・細粒砂質シルトの盛土層が存在し、黒褐色～褐灰色シルトの層を経て、褐色の極細・中粒砂質シルトあるいは角礫を含む褐色シルトの基盤層に至るというものである。TT01の基盤層は河川堆積である可能性が考えられる。

TT01の土層断面の観察からは、20Ab区からAc区にかけて検出された谷地形400NRがAb区北方にも延びていることが推定されるが、400NR埋土の中でも遺物を多く含むと想定される層はこの地点には存在しないか、既に削平されている。また、今年度の本発掘調査Aによる検出遺構・出土遺物はない。



調査区配置図（S=1/600）

２０Ａ区　調査着手前の20A区は、国道南側に盛土によって造成された平場から下った地点に位置し、３箇所の平坦面によって構成された北から左へ下る斜面地である。調査区の3区分は着手前の平坦面の区分にほぼ相当する。

調査の結果、20A区全体に渡り、主に削平によって水田のための平坦面を造成していることが判明した。削平は大部分において基盤層まで及んでおり、Aa区北半部で検出された浅い谷地形と谷地形400NRを除けば、遺物包含層は遺存しない。また、Aa区の谷地形と400NRは位置関係上同一のものである可能性がある。検出された遺構には直径30～50cmの土坑が多く、1箇所のみ柱痕跡が確認できた遺構が存在するが、それに対応するような柱穴はなく、建物などの存在は想定できない。

400NR外からの出土遺物としては石器、土器、陶磁器がある。石器には剥片、摺石・敲石、石鏃がある。土器は、楕円文の押型文土器、繊維土器、条痕文土器などの縄文土器が出土している。陶磁器は山茶碗のほか、蓮華文のある青磁碗の胴部が1点出土している。遺物は細片化したものが多く、現地点での利用・廃棄を想定できるような状況ではない。

４００NR　400NRは20Ab区からAc区にかけて検出された自然の谷地形であり、確認できた最大幅は約15m、周辺の基盤層からの最大深さは2m程度で、Ab区北方とAc区西方に延びるものと推測される。400NRの埋土は3層に分かれ、第2層および第3層はTT01やAc区西壁において対応する土層が確認されている。最も多く遺物が出土したのが第1層であるが、この層はAb区西部にしか遺存しない。

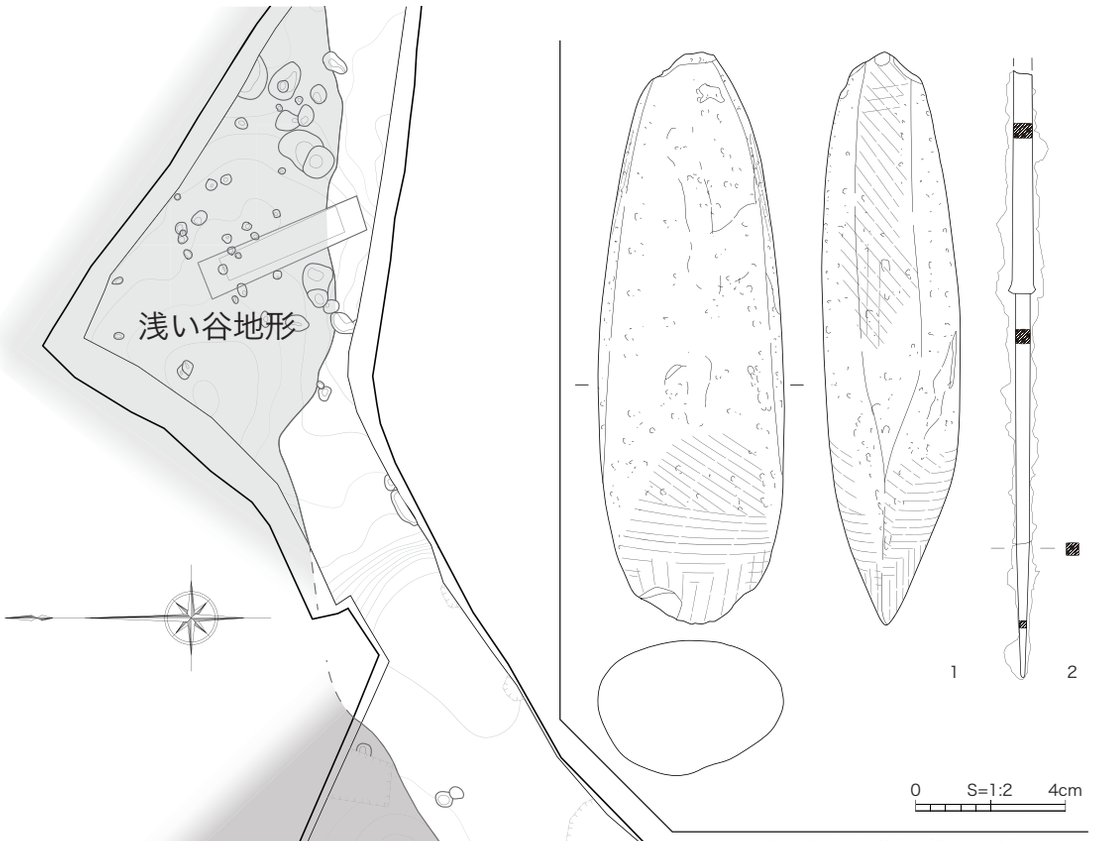
400NRからの出土遺物は石器、土器、陶磁器、鉄滓、鞴羽口、鉄器である。石器は剥片、摺石・敲石、削器およびほぼ完形の塩基性岩製磨製石斧（右図1）がある。土器は、楕円文の押型文土器や条痕文土器などの縄文土器が出土している。陶磁器は古瀬戸の瓶子1点、青磁2点のほか、渥美・湖西窯系および東濃系の山茶碗が同程度の割合で出土している。鉄滓は十数点が出土し、直径は最大で7cm程度である。鞴羽口は1点のみ出土し、鉄滓の付着が見られる。鉄器（右図2）は鉄鏃と推定される。錆に覆われて関部は明瞭でないが、X線写真を元に本来の形状を推定した。茎部の断面形状はほぼ正方形で、頸部では若干扁平に近くなる。

２０Ｂ区　調査着手前の20B区の地形は、調査区内の東端部、中央部、西端部に平坦面があり、全体として東から西へ下る傾斜地である。また、中央部と西端部の間には石垣が存在した。

調査の結果、東端部の平坦面は主に盛土によって、中央平坦面は主に削平によって造成されたものであることが判明した。20B北西壁の観察からは最大で2m以上岩盤を掘り込んで中央平坦面を造成していることが看取され、その付近では岩盤が露出している。削平の影響により、西半部ではほとんど遺構が見られないが、東半部の一部では縄文時代の遺物を含む包含層135SXが遺存する。

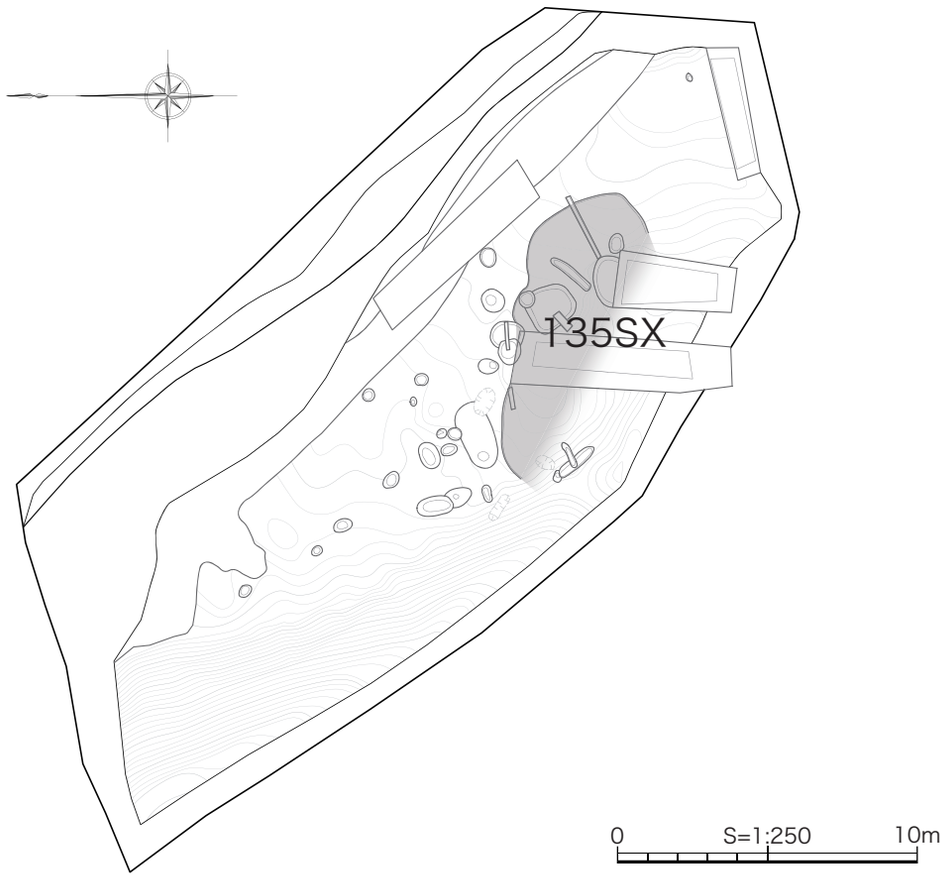
出土遺物は石器、土器、陶器で、石器には摺石・敲石類、剥片のほか、ほぼ完形の磨製石斧が1点ある。土器には繊維土器、楕円文の押型文土器が含まれる。陶器は山茶碗のほか、常滑窯の赤物が1点ある。また、地表面において山茶碗が複数点採集された。

ま　と　め　今年度の調査では住居遺構等を確認できなかったものの、一定量の山茶碗や、鉄滓・鞴羽口の出土からは中世において現地付近で鍛冶を行っていたことが推測できる。その遺構の位置は20A区より北の、国道257号南側の盛土下か国道下、あるいは国道を挟んだ北側などが想定されるが、既に滅失している可能性も十分に考えられる。　（河嶋優輝）



400NR 出土遺物（S＝1/2）

400NR 付近拡大図（S=1/300）



20B 区拡大図（S=1/250）



遺跡遠景（南東から）



TT01完掘状況



20Ac区西壁面400NR部分



20B区磨製石斧出土状況

マサノ沢（さわ）遺跡（本発掘調査A）

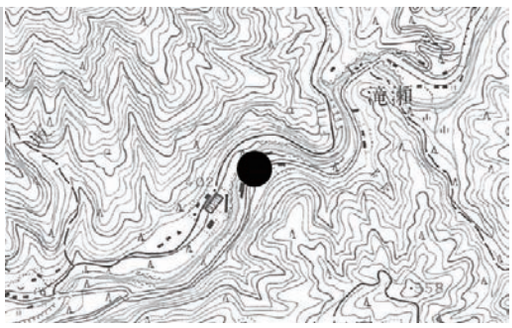
所 在 地 北設楽郡設楽町小松字マサノサワ
（北緯35度07分04秒　東経137度34分35秒）

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和2年6月

調査面積 100㎡

担 当 者 鈴木正貴・河嶋優輝・宮腰健司



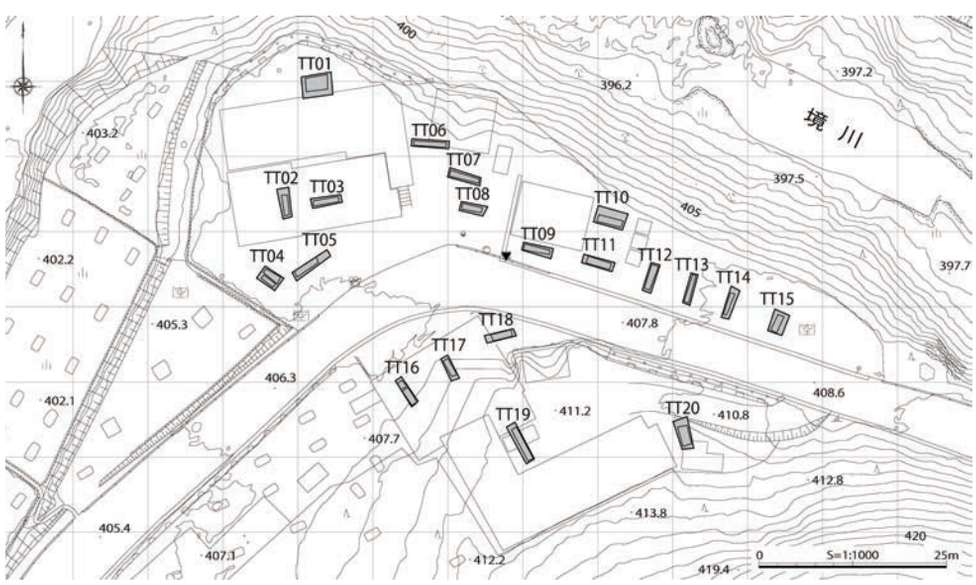
調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和２年６月に実施した。調査面積は100㎡であり、県道北側に15箇所、南側に5箇所で計20箇所のトレンチを設定した。今年度調査対象地の南西では平成28年度に本発掘調査A、平成29年度に本発掘調査Bを実施しており、土器棺墓など縄文時代後期～弥生時代前期の遺構が展開することが確認されている。

立地と環境　遺跡は、設楽町小松地区の境川左岸（東岸）の段丘面に位置する。調査対象地の標高は約407～411m、大部分は過去に工場地として利用されており、コンクリート製の構造物が多数遺存する。県道を挟んで境川側となる北側は盛土による平場となっており、南側は狭い平場とコンクリート製の擁壁によって土留めされた高台とに区分される。

調査の概要　地表面下に表土と一体化した盛土層が存在し、黒～暗褐色粘土質シルトの遺物包含層を経て、にぶい黄褐色～明褐色中粒砂あるいはシルトの基盤層に至るのが基本的な様相である。遺物包含層が確認されたのはTT01～TT06、TT08、TT10～TT12、TT20で、包含層上面の標高は約405.3m～410.0m、全体として南東から北西に向かって下る様子が見て取れる。ただし、包含層上部は多少削平されているものと思われる。

出土遺物は縄文土器、条痕文土器、摺石・敲石類、近世陶器で、近世陶器以外は遺物包含層から出土した。遺物はTT05を中心に県道北側のトレンチから出土しているが、本年度調査全体での点数は44点と少なく土器も細片化したものが多い。検出された遺構も土坑のみであり、遺物は二次堆積である可能性も考えられる。　（河嶋優輝）



トレンチ配置図（S=1/1000）

花の木古墳群・花の木遺跡（本発掘調査B）

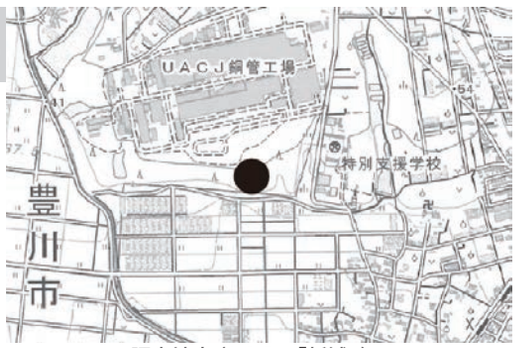
所在地 豊川市大木町地内
（北緯34度51分32秒　東経137度24分41秒）

調査理由 一般国道151号（一宮バイパス）

調査期間 令和2年5月～令和3年3月

調査面積 5,510㎡

担当者 池本正明・早野浩二・社本有弥

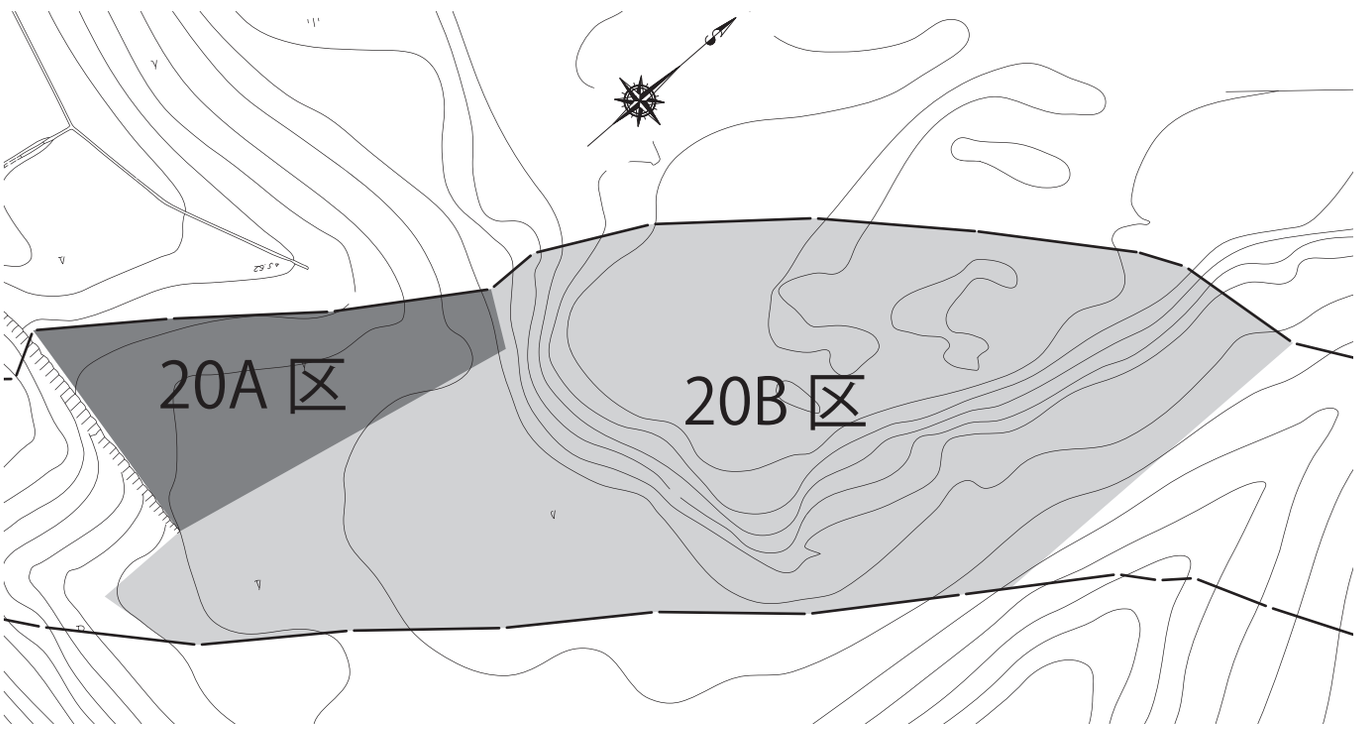


調査地点（1/2.5万「新城」）

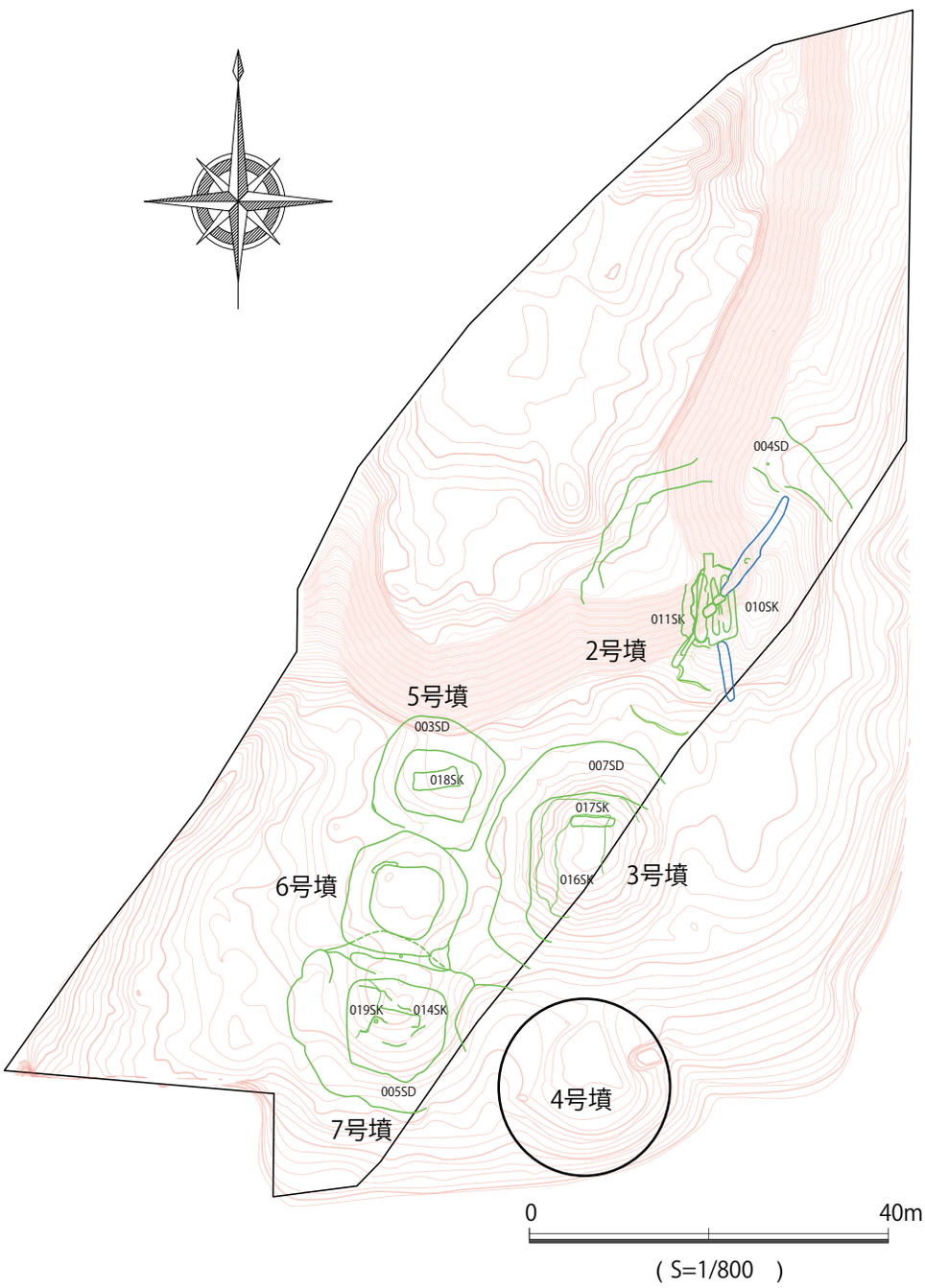
調査の経過　発掘調査は道路改良工事（一般国道151号一宮バイパス）に伴う事前調査として、東三河建設事務所道路整備課から愛知県県民文化局を通じた委託を受けて実施した。同事業に伴い、平成30年には愛知県埋蔵文化財調査センターが確認調査、令和元年には愛知県埋蔵文化財センターが本発掘調査Aを実施している。

立地と環境　花の木古墳群・花の木遺跡は本宮山山麓から広がる扇状地の末端、西原台地の縁辺に立地する。周辺には鑓水B遺跡、宝陵高校遺跡等、弥生時代の遺跡が数多く分布する。古墳群は7基の古墳が登録されている。2号墳は昭和43年に工場建設に伴って久永春男氏によって緊急調査された。平成9年には工場拡張に伴って旧一宮町教育委員会が確認調査を実施している。

調査の概要　今年度の発掘調査では調査区内の客土を除去するため、調査区南西を先行して調査した。調査前地形測量の結果、古墳は調査区内に5基分布することが想定された。2号墳は昭和43年時の調査状況の記録と墳丘の調査を実施した。3号墳、5号墳、6号墳、7号墳は墳丘と周溝の調査を実施した。古墳群の下層では弥生時代中期から後期の集落跡を調査した。その他、調査区内で縄文時代と古代の遺物が出土している。



遺跡全体図（S=1/1000）


004SD
010SK
011SK
2号墳
5号墳
003SD
018SK
007SD
017SK
016SK
3号墳
6号墳
019SK
014SK
005SD
7号墳
4号墳
0
40m
(S=1/800)

花の木古墳群全体図

2 号 墳　一辺約20m、高さ約2.5mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝の規模は幅約４.5m、深さ約0.7mである。過去の調査で埋葬施設は南北を主軸方向とする３基の木棺が確認されていたが、西側の木棺については、墓坑が掘り込まれていることが判明した。西側の木棺は他の２基の木棺の設置と墳丘の構築後に埋葬されたと考えられる。また、掘り込まれた墓壙の南は開口しており、扁平な石が敷かれていた。今回の発掘調査は過去の調査の排土中から若干の鉄製品が出土したのみであるが、既に判明している副葬品の内容から２号墳の築造時期は古墳時代前期末から中期前半と思われる。

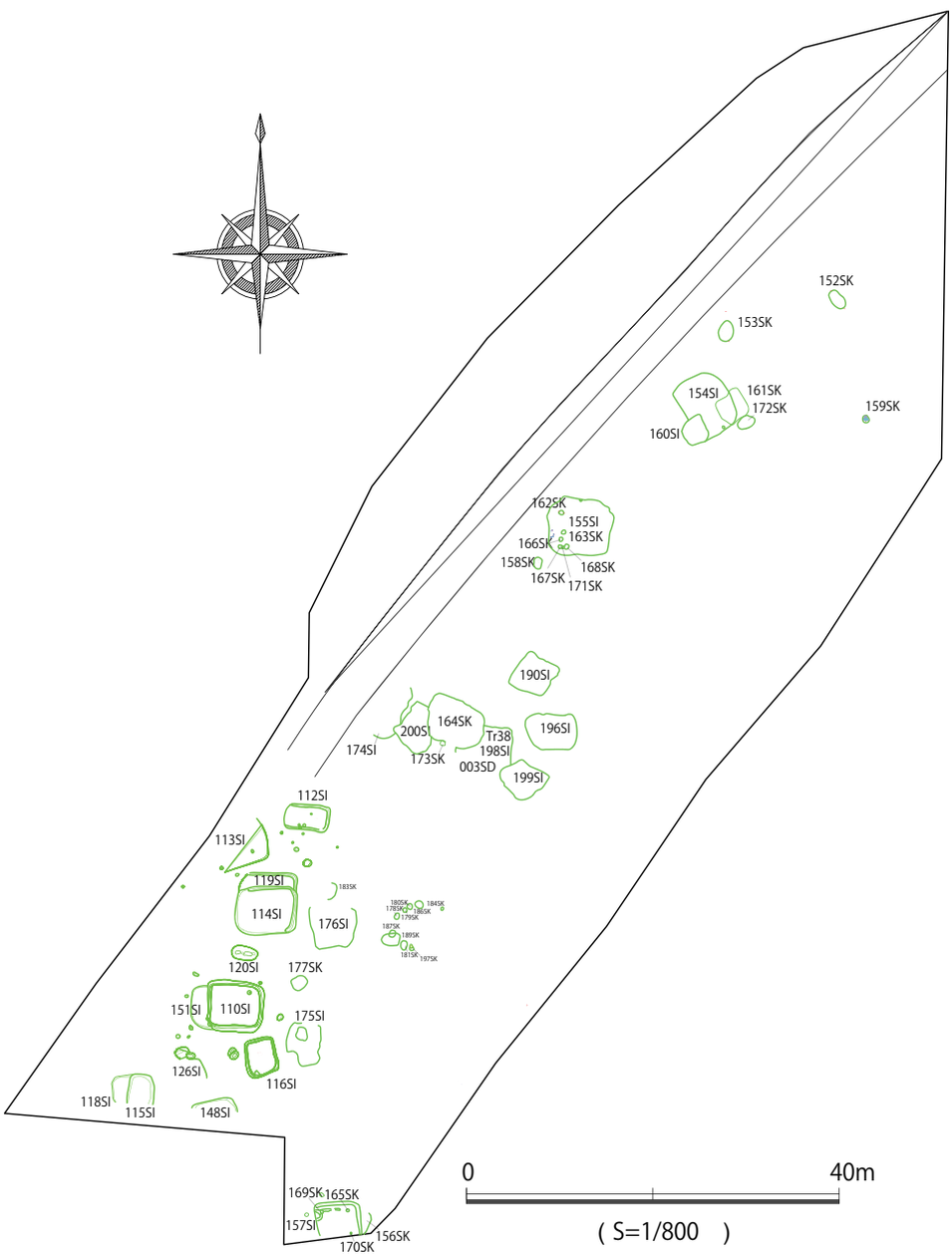
3 号 墳　一辺約19m、高さ約1.7mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝の規模は幅約４m、深さ約0.7mである。埋葬施設は墳丘中央に南北を主軸方向とする２基の木棺とその北側に東西を主軸方向とする１基の木棺が直葬されていた。２号墳と同様、埋葬施設の南側は開口している。西側の木棺には鉄製刀子が2点副葬されていた。副葬品と周囲の古墳の状況から築造時期は古墳時代前期後半から中期前半と思われる。

5 号 墳　一辺約10m、高さ約0.7mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝は幅約３m、深さ0.4mである。周溝の南東隅の底面で墳丘に供えられていたと思われる古墳時代前期後半の高杯が出土した。埋葬施設は木棺直葬で北東から南西方向を長軸とする。築造時期は出土した土器から古墳時代前期後半と思われる。

6 号 墳　一辺約11m、高さ約0.9mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝は幅約３m、深さ約0.7mである。南溝底面付近で墳丘から転落したと思われる土師器の壺が出土している。埋葬施設は北東から南西方向を長軸とする木棺が直葬されていた。築造時期は出土土器から古墳時代前期後半と思われる。

7 号 墳　一辺約14m、高さ0.8mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝の規模は幅約３m、深さ0.7mである。墳丘東側斜面では滑石製玉類がまとまって出土した。内訳は勾玉14点、棗玉11点、管玉１点、臼玉約80点である。埋葬施設は墳丘北側に片寄った位置に東西を主軸方向とする木棺２基が併設されていた。墓壙の西側は開口している。埋葬施設には鉄製品、瑪瑙製と翡翠製の勾玉が副葬されている。鉄製品は２基とも武器類と農工具類である。瑪瑙製勾玉は北側の木棺の内外にそれぞれ１点ずつ、翡翠製勾玉は木棺の中に置かれていた。古墳の築造時期は滑石製玉類や副葬品の内容から古墳時代中期前半と思われる。

弥生時代中期から後期の遺構　弥生時代中期から後期にかけての集落が確認された。弥生時代中期の竪穴建物は、平面形態が小判形で規模は長軸４m、短軸３mである。炉は地床炉である。弥生時代後期は竪穴建物約20棟と数十基の土坑を検出している。遺構は平坦地である古墳群の周辺を中心に谷へ落ち込んでいく緩斜面地まで広く分布している。竪穴建物の平面形態は隅丸方形が主体で、規模は最大のものが約６m四方、最小のものは長軸約５m短軸３mである。炉は地床炉で一部埋石を伴うものもある。多くの竪穴建物の壁沿いには一部ないし全周する壁溝がある。主柱穴は不明瞭なものが多い。一部には馬蹄形遺構を伴うものがある。焼失住居も多く確認されている。出土遺物は土器は壺・甕・高杯が主で、石器・石製品は磨製石鏃、磨製石斧、打製石斧、石錘、磨製石剣などが出土している。


152SK
153SK
154SI
161SK
172SK
159SK
160SI
162SK
155SI
163SK
166SK
158SK
168SK
167SK
171SK
190SI
164SK
200SI
196SI
Tr38
198SI
174SI
173SK
003SD
199SI
112SI
113SI
119SI
114SI
176SI
120SI
177SK
151SI
110SI
175SI
126SI
116SI
118SI
115SI
148SI
169SK
165SK
157SI
156SK
170SK
0
40m
(S=1/800)

花の木遺跡全体図

調査区内出土の石器　調査区の広い範囲で石器が出土している。原位置ではない可能性が高い。出土した石器は石鏃、石匙、削器、石錐、打製石斧、磨製石斧などである。乳棒状石斧などの縄文時代後期で出土する石器が出土しているため、石器群の縄文時代後期を主体とすると思われる。石器石材は黒曜石と凝灰岩を主体としている。

ま と め　今回の発掘調査で花の木古墳群は古墳時代前期後半から中期前半に築造されたことが判明した。2号墳・3号墳は古墳の構築過程を理解できる良好な調査例となるだろう。7号墳に副葬されていた豊富な鉄製品群は古墳時代中期前半の副葬品の配置や組成を知る上で好例と言える。また、7号墳東斜面で出土した滑石製玉類は墳丘上祭祀に伴うものと思われ、埋葬儀礼を復元できる好例である。

花の木遺跡は出土遺物から弥生時代中期後半から後期にかけての集落であることがわかった。良好に遺構・遺物が確認され、西原台地周辺の遺跡群の実態を知ることができる良い事例になるであろう。また遺物は土器を中心として石器や石製品の出土もあり、当時の生活を復元する上で良い調査例と言える。（早野浩二）



2号墳埋葬施設周辺状況



3 号墳埋葬施設検出状況



5 号墳埋葬施設検出状況



6 号墳埋葬施設検出状況



7 号墳埋葬施設検出状況



114SI・119SI 完掘状況



110SI・151SI 完掘状況



157SI 内馬蹄形遺構検出状況